

中世・近世日韓関係史料解題集

佐伯弘次・須川英徳・桑野栄治編

〔解 説〕

本史料解題集は、第2分科会本報告書の付編として作成したものである。中世(11世紀後半～16世紀末)・近世(16世紀末～19世紀後半)の日本において作成され、かつ近代以降に日本で刊行された日韓関係史(日麗関係史・日朝関係史)に関する史料のうち、主要なものの解題集である。近代以降に編纂・刊行された、中近世日韓関係史に関する史料集の解題も含んでいる。

本解題を作成し、本報告書に収録することになったきっかけは、「今後の研究に役に立つものとして、史料に関する解題の作成を提案する」という第2分科会日本側幹事の須川英徳氏の発言であった(2007年8月25日第2分科会合同会議、於濟州島)。その提案は、2007年10月13日開催の第2分科会合同会議(於福岡市)において承認され、日本側の作成作業は主として佐伯が担当することになった。

具体的な作業としては、〔中世〕〔文禄・慶長の役〕〔近世〕の3時期に分けて、おのおの研究補助者に史料の抽出と下書き原稿の作成をお願いした。その際、各種データベース・事典類・研究書等を適宜参照した。作業していただいた研究補助者は以下の通りである(肩書きは作業当時のもの)。

荒木 和憲(日本学術振興会特別研究員)

古賀 慎也(九州大学大学院比較社会文化学府修士課程)

守 友 隆(九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程)

戸板 将典(九州大学大学院人文科学府修士課程)

作成していただいた下書き原稿をもとに、佐伯が、研究補助者とともに体裁や内容を統一する作業を行った。これに解説と凡例を加え、日本側委員全員の校閲を経た後、本解題集が完成した。

当初、中近世にわたる大型の叢書・史料集の解題を〔総記〕として作成していたが、それらの中から各時期の部で個別に採録したものが多くあり、また分量的な問題もあって、〔総記〕部分を割愛した。〔総記〕として原稿を作成していた叢書・史料集は、『九州史料叢書』『群書類従』『国史叢書』『国史大系』『古事類苑』『史籍集覧』『史料纂集』『史料大成』『新註皇学叢書』『続群書類従』『続々群書類従』『大日本古記録』『大日本古文書』『大日本史料』『大日本仏教全書』『図書寮叢刊』等である(あいうえお順)。とくに『大日本史料』には、各編に多くの日麗・日朝関係史料を収録している。

1. 中世史料の特色

中世の部では、日麗関係、中世後期(朝鮮前期)の日朝関係に関する史料及び史料集を収録した。日本の中世史料を代表するのは、古文書と古記録(日記)である。この他、編纂された史書・著作も多い。古文書としては、『金沢文庫古文書』『鎌倉遺文』『教王護国寺文書』『長門二ノ宮忌宮神社文書』『平安遺文』『宗像神社文書』等があり、量的には少ない。これは、中世の日麗・日朝関係文書が偶発的な要因で作成され、家文書の中に伝来したことにより、まとまった関係文書の伝来が少ないという理由によると考えられる。これに比べると古記録は、『蔭涼軒日録』以下、多数の史料を収録している。これらは京都やその周辺に住む貴族・僧侶・神官等の日記であり、高麗使節・朝鮮使節の来日や蒙古襲来に関する記事を多く含む。記主たちの外国・外国人や対外関係に対する関心の大きさを物語っている。

編纂された史書その他としては、『吾妻鏡』『異称日本伝』『鎌倉年代記』『鶏林拾葉』『皇代暦』『五代帝王物語』等々、多くの史料がある。ただしその史料的性格は多様であり、史料的価値もまちまちである。一次史料ではないという点において、使用するには注意を要するものも多い。

この他、『京都帝国大学国史研究室蔵史料集』『元寇史料集』を始めとして、個別の史料集も多く収録している。その中では、『中国・朝鮮の史籍における日本史料集成』が日麗・日朝関係史料集として重要であり、『伏敵編』は蒙古襲来関係史料の古典として著名である。また、これら史料集の中の『相生市史』第8巻、『上対馬町誌』史料編、『太宰府市史』古代資料編・中世資料編、『豊玉町の古文書(中世文書)』、『長崎県史』史料編第一、『平戸市史』歴史史料編Ⅰ、『広島県史』古代中世資料編Ⅲ、『山口県史』史料編中世1～4等は、自治体が編纂・刊行した地方史誌である。こうした地方史誌の刊行は、日本における史料集刊行の大きな特色であるといえる。

2. 文禄・慶長の役関係史料の特色

文禄・慶長の役に関する史料・史料集の中心は、古文書・古記録・編纂史料の3者である。古文書としては、「久留島文書」「黒田家文書」「田尻家文書」「鶴田家文書」「龍造寺文書」「佐竹文書」「浅野家文書」「伊達家文書」「相良家文書」「毛利家文書」「小早川家文書」「上杉家文書」「島津家文書」「中川家文書」「歴代古案」等々があり、中世と比較すると激増している。これはこの時期に文書が増加することもあるが、文禄・慶長の役に参加した大名・家臣の家文書が多数残っていることも大きな要因である。ほとんどが武家文書である。

古記録としては、『義演准后日記』『北野社家日記』のような中央の貴族・僧侶・社家による伝統的な日記も多いが、これに加えて、『家忠日記』『大和田重清日記』『高麗日記』のような武家日記が多く登場することも大きな特色である。豊後国臼杵安養寺の僧慶念の「朝鮮日々記」は、慶長の役に従軍した地方僧侶の日記として珍しい史料である。

編纂史料も多いが、『太閤記』『大かうさまくんきのうち』は豊臣秀吉周辺の人物が記したものである。

『群書類従』『続群書類従』には、文禄・慶長の役に従軍した武士が後世に記した「覚書」の類がいくつか収録されている。こうした覚書は日本各地で多数作成されたが、多くは未刊のままである。また、『フロイス日本史』は、書き手がキリシタン宣教師であるという点において、特徴的な歴史書になっている。

3. 近世史料の特色

近世になって幕藩体制が成立し、藩体制が整ってくると、各藩で多くの文書・記録類が作成され、保存された。また、農村文書を中心とする^{じかた}地方文書も膨大に作成された。「記録の時代」ともいわれる日本近世の史料は、その量の多さ故に多くが未刊のままである。近世の部に収録した史料は、武家文書や地方文書が大半を占める。

近世においては、『異国日記』『華夷変態』『外蕃通書』（『近藤正斎全集』第1）『朝鮮通交大紀』『通交一覽』等々、外交史料集が多数編纂された。これはこの時代において、外交史研究が進展したことの現れでもある。これらと並んで、新井白石・雨森芳洲・亀井南冥・同昭陽・草場佩川・近藤正斎といった学者・政治家・外交官の関係史料集もよく刊行されている。この他、語学・美術・歌舞伎・縁起・農書等々、多岐にわたる史料が刊行されており、近世における史料的な広がりをはかることが出来る。

刊行された史料を内容的に見ると、朝鮮通信使関係史料が多いのが特徴的である。『大系朝鮮通信使 善隣と友好の記録』『朝鮮通信使絵図集成』はその代表であるが、明石藩・岩国藩・岡山藩・豊浦藩・広島藩・福岡藩などの藩政史料、沿道の家文書に残る関係史料が刊行されている。その多くは自治体が刊行した地方史誌である点も大きな特色である。朝鮮通信使関係史料に比べると、それ以外の外交関係史料や貿易関係史料の刊行は少ない。

対馬藩宗家文書は、近世日朝関係史の基本史料である。膨大な宗家文書の中から、「朝鮮通信使記録」「江戸藩邸日記」「倭館館守日記・裁判記録」の3種類が、マイクロフィルム版で刊行されているのは、近世日朝関係史研究にとって特筆すべきである。（佐伯弘次）

〔凡 例〕

1. 日本で作成・著述・編纂された日麗関係史・日朝関係史に関する史料の内、活字や影印・マイクロフィルム等の形で公刊された史料や史料集を収録した。
2. 時代的には、日本でいえば平安時代から近世末、韓国でいえば高麗時代から朝鮮時代後期に至る史料を収録した。
3. I 中世、II 文禄・慶長の役、III 近世の3部構成とした。中世は平安時代～戦国時代（高麗時代～朝鮮前期）の時期、文禄・慶長の役は文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱）の時期、近世は江戸時代（朝

鮮後期)の時期に相当する。中には必ずしもこの時代区分内に収まらない史料や史料集があるが、最も関係が深い時代の箇所に適宜配した。

それぞれの時代の中では、あいうえお順で史料を配列した。

4. 冒頭に史料や史料集のタイトルを記した。タイトルについてはルビを付した。刊本になっているものは『 』で、個別の史料は「 」で示した。

[1. 内容]の項では、史料や史料集の内容について記し、とくに日麗関係・日朝関係に関する史料の概要について記した。

[2. 備考]の項では、編集・刊行・刊行年のデータを記した。さらに複数の刊本がある場合や、特記すべき事項がある場合には、それを記した。

I [中世]

(あいおいしし)だいはちかんじょう げ
『相生市史』第八卷上・下

1. 内容

中世の東寺領播磨国矢野荘に関する編年史料集。東寺百合文書や教王護国寺文書などから、多数の史料を収める。永和元年(1375)・同5年・康暦2年(1380)などの高麗使節の来日時に、播磨守護赤松氏が矢野荘に対し、送夫(人夫)・伝馬などを賦課した記録がある。

2. 備考

相生市史編纂委員会編。相生市刊。1992～95年。

(あずまかがみ)
『吾妻鏡』

1. 内容

鎌倉幕府が編纂した歴史書。治承4年(1180)から文永3年(1266)までの歴代将軍の実録を編年体で叙述したもの。前半部(源氏将軍期)を文永年間(1264～75)の成立、後半部(摂家将軍・皇族将軍期)を正応・嘉元年間(1288～1306)の成立とみる説がある。本書は編纂史料としての限界性をはらむが、豊富な内容を持ち、鎌倉期の日本と高麗との交流をしめす記事も多く、嘉禄3年(1227)の高麗国全羅州道按察使牒写も収録する。

2. 備考

- ①高桑駒吉・依田喜一郎・成川睿次郎校訂『吾妻鏡』(大日本図書、1896年)全10冊。
- ②『続国史大系』第4-5冊・吾妻鏡(経済雑誌社、1903年)。
- ③国書刊行会編・刊『吾妻鏡』全3冊(1915年)。
- ④與謝野寛編纂校訂『吾妻鏡』(日本古典全集・第1回、日本古典全集刊行会、1926年)。
- ⑤国書刊行会編『吾妻鏡』全2冊(大観堂、1943年)。
- ⑥黒板勝美・国史大系編修会編『新訂増補国史大系』第32-33冊・吾妻鏡・全2冊(吉川弘文館、1964～1965年、普及版は1968～1976年・全4冊)。
- ⑦『振り仮名つき吾妻鏡』(寛永版影印、汲古書院、1976年)。

原本は現存せず、北条本・吉川本・島津本が良好な写本である。このうち北条本を底本とした刊本が②・⑥(⑥は吉川本・島津本と校合)、吉川本を底本とした刊本が③・⑤である。①の底本は、伊勢貞丈水谷本を以て寛永本を校訂したもの、④・⑦の底本は、寛永本である。

いそやすこうわぼくをめぐらさうせんつしまそうしやくじょうあいさだむるしだいならびにつしましき
「家康公命 和睦朝鮮対馬送使約条相定次第并対馬私記」

1. 内容

近世対馬藩の外交僧規伯玄方が藩主宗義真に献上した巻物5本のうちの1本。東京国立博物館所

I. 中世

蔵写本の影印版。16世紀前半における対馬宗氏の偽使派遣体制をしめす。

2. 備考

田代和生・李薫監修『朝鮮通信使記録』別冊下(対馬宗家文書マイクロフィルム版第I期、ゆまに書房、2000年)。

『異称日本伝』

1. 内容

中国・朝鮮の書物から日本関係記事を抄録し、疑問や批判を加えた書物。松下秀明(号は、見林・西峯)編。元禄元年(1688)成立。同6年(1693)刊。上・中・下3巻からなり、下巻に朝鮮の書物15種(『海東諸国紀』など)を収録する。また、倭寇や秀吉の朝鮮出兵に関係する記事も多数収める。

2. 備考

- ①『改訂史籍集覧』第20冊(近藤活版所、1901年)。
- ②『新註皇学叢書』第11巻(広文庫刊行会、1927年)。
- ③『異称日本伝』(国書刊行会、1975年、影印本)。

『蔭涼軒日録』

1. 内容

室町・戦国期の相国寺鹿苑院蔭涼軒主季瓊真薬(1401～1469)および亀泉集証(1424～1493)の日記。現存する記事は、永享7年(1435)から明応2年(1493)におよぶ。相国寺慈照院旧蔵原本は、関東大震災(1923年)のため大部分が焼失したが、その一部が東京大学史料編纂所に所蔵されている。蔭涼軒主は鹿苑僧録の補佐役であったが、季瓊真薬が幕府重臣赤松氏の出自であったため、室町幕府の政治・外交にふかく関与するようになった。それゆえ、永享11年(1439)から明応2年(1493)にかけて室町幕府の対朝鮮外交にかかわる記事を豊富におさめる。

2. 備考

- ①仏書刊行会編・刊『大日本仏教全書』日記部・第133～137冊・蔭涼軒日録(1932～1937年)全5冊。
 - ②史籍刊行会編・刊『蔭涼軒日録』(1953～54)全5冊。
 - ③鈴木学術財団編・刊『大日本仏教全書』日記部・第75～78冊・蔭涼軒日録(1972年)全4冊。
 - ④竹内理三編『増補続史料大成』(臨川書店、1978年)全5冊。
- ①・③は慈照院旧蔵原本を底本として国立公文書館内閣文庫所蔵写本で校訂したものであり、②は①の複製版、④は②の複製版である(②・④は史料編纂所所蔵原本により逸文を収録)。

『^{うぶえいどのちようせんとかいのぎのこう}右武衛殿朝鮮渡海之雜稿』

1. 内容

僧天荊が記した朝鮮渡航の日記。天荊は、天正5年(1577)10月に兵庫を発ち、赤間関・博多・壱岐・対馬を経て、翌6年11月に釜山に渡った。翌7年正月に漢城に出発し、漢城で国王宣祖に対面、その後、漢城から釜山に帰り、釜山滞在中の同年7月12日条で日記は終わる。天荊は、右武衛殿の使節として朝鮮に渡海したという体裁を取るが、この右武衛殿は、対馬宗氏が仕立てた架空の人物・九州探題渋川義明である。本史料は、中世末の宗氏による朝鮮貿易独占の時代における外交・貿易の実態がうかがえる好史料である。

2. 備考

珍書同好会叢書。珍書同好会刊行。1915年。原本は尊経閣文庫所蔵。

『^{おかのやかんぱくき}岡屋関白記』

1. 内容

鎌倉期の公卿藤原兼経(1210～1259、極官関白、近衛家)の日記。記事は貞応元年(1222)から建長3年(1251)におよぶ。内容は、公家社会の伝統行事に関する記事が多いが、安貞元年(1227)の高麗からの外交文書をめぐる記事もふくまれており、注目される。

2. 備考

①陽明文庫編『岡屋関白記・深心院関白記・後知足院関白記』(陽明叢書6・記録文書編第2輯、思文閣出版、1984年)全1冊。

②東京大学史料編纂所編『大日本古記録』岡屋関白記(岩波書店、1988年)全1冊。

『^{ゆどのうえにつき}お湯殿の上の日記』

1. 内容

宮中の御湯殿上の間で天皇近侍の女官が記録した日記。現存する記事は、室町期から江戸末期におよぶ。京都御所東山文庫所蔵原本(室町・戦国期の原本は一部のみ)・写本のほか、高松宮家本などの写本がある。延徳2年(1490)に朝廷が室町幕府に「高麗勘合」を要求したことをしめす記事がある。

2. 備考

①『続群書類従』(続群書類従刊行会、1956～1957年)全11冊。

『^{がうんにつけんろくぼつめう}臥雲日件録拔尤』

1. 内容

室町期の禅僧瑞溪周鳳(1391～1473、別号臥雲)の日記である『臥雲日件録』の抄録。惟高妙安編。

I. 中世

『臥雲日件録』全74冊は文安3年(1446)から文明5年(1473)年までの記事を収録していたが、すべて散逸し、現在は『抜尤』1冊のみが伝存する。長祿元年(1457)から同3年(1459)にかけて、室町幕府の対朝鮮外交にかかわる記事がみえる。

2. 備考

- ①近藤瓶城編『続史籍集覧』第3冊(近藤活版社、1930年)。
- ②東京大学史料編纂所編『大日本古記録』臥雲日件録抜尤(岩波書店、1961年)全1冊。

『かなざわぶんこもんじょ金沢文庫古文書』

1. 内容

全19冊(索引・付録あり)。鎌倉期の金沢流北条氏の古文書群を中心に活字化したもの。第3冊(僧侶書状編下)に「高麗本」の日本流入をしめす古文書、第9冊(仏事編下)には高麗国王書(1292年)および「蒙古信使記録」を収録する。なお、第10冊(識語編1)に高麗版の經典類を収録する。

2. 備考

金沢文庫編・刊。1952～1964年。

『かまくらいぶん鎌倉遺文』

1. 内容

鎌倉期(中世前期)の古文書を網羅的に収集することを基本とした編年史料集であり、日韓関係史料(高麗)も多くふくむ。収録範囲は文治元年(1185)から建武元年(1334)におよぶ。古文書編42冊・補遺4冊・索引編5冊。東京堂出版から全文データベースが刊行されており、また、中世海事史料研究会編『鎌倉時代水界史料目録』(東京堂出版、2003年)も有用である。

2. 備考

竹内理三編。東京堂出版刊。1974～1995年。

『かまくらねんだいき ほうじょうきゅうだいき鎌倉年代記』(北条九代記)

1. 内容

鎌倉時代を扱う年代記。編者は鎌倉幕府関係者とされる。元弘元年(1331)ごろの成立(成立後の追記・裏書あり)。現存する記事は寿永2年(1183)から正慶元年(1332)におよぶ。天皇・年号・撰関・将軍・執権連署・六波羅探題・問注所・政所などの項目に分けられている。京都大学附属図書館所蔵壬生家旧蔵原本があり、「北条九代記」と題する写本が流布する。安貞元年(1228)から正安3年(1301)にかけて、日本朝廷の対高麗外交やモンゴル襲来にかかわる記事をおさめる。

2. 備考

- ①『史籍集覧』北条九代記。

- ②『続群書類従』第29冊上。
- ③『改訂史籍集覧』第5冊。
- ④『増補続史料大成』第51冊・鎌倉年代記・武家年代記・鎌倉大日記(臨川書店、1979年)。

『かみつしまちようし しりょうへん上対馬町誌』史料編

1. 内容

対馬市上対馬町所在の古文書・経典を収録し、年表を付す。中世の史料としては、大浦家文書・洲河家文書・比田勝家文書・平山家文書など、24家の家文書を収める。『海東諸国紀』に登場する朝鮮通交者・大浦宗氏(河内大浦氏)の家文書など、日朝関係史料も多い。この他、琴長松寺所蔵の高麗版大般若経(初雕本)のデータや写真を収める。

2. 備考

上対馬町誌編集委員会編。上対馬町刊。2004年。

『かんちゅうき勘仲記』

1. 内容

鎌倉期の公卿藤原兼仲(1244～1308、勘解由小路家・広橋家、極官権中納言)の日記。

現存する記事は文永11年(1274)から正安2年(1300)年におよぶ。財団法人東洋文庫所蔵原本のほか、数多くの写本がある。文永11年(1274)から弘安4年(1281)にかけて「文永・弘安の役」関係記事を収録する。また、将軍惟康親王の京都送還と久明親王の将軍宣下および関東下向、両統迭立などの記事も収め、鎌倉後期の政治史を語る上での一級史料である。

2. 備考

- ①笹川種郎編『史料通覧』(日本史籍保存会、1917年)2冊。
- ②笹川種郎編・矢野太郎校訂『史料大成』26～27勘仲記28勘仲記・妙槐記(内外書籍、1935～36年)3冊。
- ③増補史料大成刊行会編『増補史料大成』34～35勘仲記(臨川書店、1965年)2冊。

『かんまんにっき看聞日記』

1. 内容

室町期の後崇光院伏見宮貞成親王(1372～1456)の日記。現存する記事は応永23年(1416)から文安5年(1448)におよぶ(別記あり)。ただし、一部欠落あり。応永26年(1419)から嘉吉3年(1443)にかけて、「応永の外寇」や朝鮮通信使の来日などについての記事をおさめる。巷説などの伝聞記事が中心であるため、内容を吟味する必要があるものの、政治史のみならず、文化史および芸能史研究において、貴重な史料である。

2. 備考

- ①統群書類従完成会編・刊『統群書類従』補遺2(1958～1959年)全2冊。
- ②宮内庁書陵部編・刊『図書寮叢刊』看聞日記(2002年～)既刊4冊。

『吉統記』

1. 内容

鎌倉期の公卿藤原経長(1239～1309、吉田家、極官権大納言)の日記。現存する記事は文永4年(1267)から乾元元年(1302)におよぶ。原本は現存しないが、甘露寺親長(経長の五代孫)書写本の系統をひく写本が数多くある。朝儀に関する記事が多く、また、両統迭立に関する記事も含む。さらに、文永5年(1268)から正安3年(1301)にかけて「文永・弘安の役」関係記事を収録しており、とりわけ文永8年(1271)の高麗三別抄からの外交文書をめぐる記事が注目される。

2. 備考

- ①笹川種郎編・矢野太郎校訂『史料大成』23吉記・吉統記(内外書籍、1935年)。
- ②増補史料大成刊行会編『増補史料大成』30吉記・吉統記(臨川書店、1965年)。

『吉記』

1. 内容

平安・鎌倉期の公卿藤原経房(1143～1200、吉田家、極官権大納言)の日記。仁安元年(1166)から建久4年(1193)におよぶ日記であったが、現存する記事は仁安元年(1166)から建久2年(1191)までである。原本は現存しないが、経房の孫資経の抄写本の系統をひく写本のほか、数多くの写本がある。内容は、朝儀に関するものがほとんどを占めるが、治承5年(1181)の「新羅」襲来の風聞が記録されている。

2. 備考

- ①笹川種郎編・矢野太郎校訂『史料大成』22・23吉記(内外書籍、1935年)。
 - ②増補史料大成刊行会編『増補史料大成』29吉記30吉記・吉統記(臨川書店、1965年)。
 - ③高橋秀樹編『吉記』本文編1～3(日本史史料叢刊3-5、和泉書院、2002年～)。
- ①・②の底本は国立公文書館内閣文庫所蔵旧紅葉山文庫本であり、③は諸写本中、それぞれの箇所において比較的善本と思われるものを選んで定本としている。

『教王護国寺文書』

1. 内容

全10冊。仏事・法会に関するものや、寺院経済を支えた多くの荘園文書を収録。第2冊(南北朝時代・室町時代前期)に、永和4年(1378)の高麗使節の来日にあたって東寺領矢野荘に「高麗人上洛人

夫」が賦課されたことをしめす古文書を収録する。

2. 備考

赤松俊秀編。平楽寺書店刊。1960～1971年。

『きょうとていこくだいがくこくしけんきゅうしつぞうしりょうしゅう京都帝国大学国史研究室蔵史料集』

1. 内容

史料(図版)1～55とともに史料解説を収める。史料には、毛利輝元祈願文、正伝寺宏覚禪師蒙古降服祈願開白文や朝鮮国王李昞書翰等が含まれている。

2. 備考

- ①『京都帝国大学国史研究室蔵史料集』(京都帝国大学文学部国史研究室編・刊、1928年)。
- ②『京都帝国大学国史研究室蔵史料集』(京都帝国大学文学部国史研究室編、限定第2版、星野書店、1933年)。
- ③『京都帝国大学国史研究室蔵史料集』(京都帝国大学文学部国史研究室編、限定第3版、星野書店、1935年)。

『ぎよくよう玉葉』

1. 内容

平安・鎌倉期の公卿藤原兼実(1149～1207、九条家、極官摂政・関白・太政大臣)の日記。現存する記事は長寛2年(1164)から建仁3年(1203)におよぶ。原本は現存しないが、数多くの写本があり、なかでも宮内庁書陵部所蔵九条家本が善本である。公家・武家双方について、正確な情報を多く伝えており、平氏政権～鎌倉初期にかけての政治・文化史における基本史料である。文治2年(1186)に対馬守藤原経光が亡命先の高麗から帰国したことをしめす記事がある。

2. 備考

- ①山田安栄ほか校訂『玉葉』(東京活版株式会社、1906)。
 - ②国書刊行会編・刊『玉葉』(国書刊行会、1906～07)3冊。
 - ③栗田寛校閲・黒板勝美校正『玉葉・九条兼実公記』(哲学書院、1908)2冊。
 - ④国書刊行会編『玉葉』(名著刊行会、1971)3冊。②の復刻版。
 - ⑤宮内庁書陵部編・刊『九条家本玉葉』(1994～)11冊。
- ②・⑤・⑥は九条家本(鎌倉期の清書本)、③・④の底本は国立公文書館内閣文庫所蔵旧紅葉山文庫本である。

『愚管記』(後深心院関白記)

1. 内容

南北朝期の公卿藤原道嗣(1332～1387、近衛家、極官関白)の日記。現存する記事は、永和元年(1352)から永徳3年(1383)におよぶ。貞治6年(1367)から永和2年(1376)にかけて、高麗使節(金龍・羅興儒)をめぐる朝廷内の議論の経過が記録されている。

2. 備考

- ①坪井九馬三・日下寛校訂『愚管記』(文科大学史誌叢書、吉川半七、1906年、和装本、影印本)全12冊。
- ②竹内理三編『続史料大成』第1～4冊・愚管記(臨川書店、1967年)全4冊、①の復刻版。
- ③竹内理三編『増補続史料大成』第1～4冊・愚管記(臨川書店、1978年)全4冊。
- ④東京大学史料編纂所編『大日本古記録』後深心院関白記(1999年～)既刊3冊。

『鷄林拾葉』

1. 内容

塙保己一編。文政2年(1819)年刊。全8巻。古代・中世の古文書・古記録・歴史書などから朝鮮半島との交流をしめす記述を抄出したものであり、天正18年(1590)の朝鮮通信使の来日までを収録する。現在では利用価値が低い、他の刊本に収録されていない史料もみられる。

2. 備考

- ①塙保己一編『鷄林拾葉』全3冊(甫喜山景雄、1883年、和装本)。

『元寇史料集』

1. 内容

元寇に関する史料を複製版で刊行したもの。軸装本一・二の2巻。釈文と解説を掲載した『元寇史料集解説』1冊を付す。一には、正伝寺所蔵「宏覚禅師祈願開白文」2通と石清水八幡宮文書「八幡宮崎宮御神宝記」紙背文書を収める。後者は、建治2年(1276)に高麗を攻撃しようとした異国征伐に関する史料である。二には、京都大学所蔵「壬生官務家日記抄」を収める。これは弘安4年(1281)の小槻顕衡の日記であり、弘安の役に関する貴重な同時代史料である。

2. 備考

- 国民精神文化研究所編・刊。1935年。

『建内記』

1. 内容

室町期の公卿万里小路時房(1394～1457、極官内大臣)の日記。現存する記事は応永21年(1414)

から康正元年(1455)におよぶ。時房自身が南都伝奏を勤めたので、室町幕府の動静などについて詳細な記事が見られる。室町前～中期にかけての政治史、社会経済史における基本史料の一つである。永享12年(1440)および嘉吉3年(1443)の朝鮮使節来日、文安4年(1447)の日本国王使派遣の記事をおさめる。

2. 備考

- ①東京大学史料編纂所編『大日本古記録』建内記(岩波書店、1963～1986年)全10冊。

『皇代曆』 こうだいろき

1. 内容

年代記の一つ。神代から後土御門までの各天皇(記事は文明9年(1477)まで)について記す。文永4年(1267)から弘安4年(1281)年にかけて、モンゴル襲来に関する記事をおさめる。刊本には、『歴代皇紀』の名で収録されるが、これは徳川光圀の命名であると言われる。

2. 備考

- ①「校本歴代皇紀」(近藤瓶城『改定史籍集覧』(近藤活版所、1901年)第1冊第1)。
②「校本歴代皇紀」(近藤瓶城『改定史籍集覧』(臨川書店、1997年、復刻版)第1)。

『後愚昧記』 ごぐまいき

1. 内容

南北朝期の公卿藤原公忠(1324～1383、三条家、極官内大臣)の日記。現存する記事は康安元年(1361)から永徳3年(1383)におよぶ。貞治6年(1367)の高麗使節(金龍)をめぐる朝廷内の議論の経過を記録している。

2. 備考

- ①東京大学史料編纂所編『大日本古記録』後愚昧記(岩波書店、1980～92)全4冊。

『五代帝王物語』 ごだいていおうものがたり

1. 内容

鎌倉後期をあつかう歴史書(編年体)。仮名書き。編者不詳。成立時期は13世紀末期～14世紀初期。現存する記事は承久3年(1221)から文永9年(1272)におよぶ。内容は公家社会の慣習に関わるものが多い。

2. 備考

- ①『群書類従』第2冊(経済雑誌社、1893年、再版1898年)。
②『群書類従』第3冊(続群書類従刊行会、1933年、訂正3版1960年)。
③弓削繁『京都大学附属図書館蔵 五代帝王物語』(和泉書院、1989年)。

④弓削繁『六代勝事記・五代帝王物語』(三弥井書店、2000年)。

①・②の底本は村井古巖所蔵本、③は近衛家本の影印本、④の底本は近衛家本である。

『権記』

1. 内容

平安期の公卿藤原行成(972～1027、極官権大納言)の日記。正暦2年(991)から寛弘8年(1011)までの記事が残存する。原本は現存しないが、宮内庁書陵部所蔵伏見宮家本をはじめ多くの写本がある。平安中期の政治・儀式・社会・文化を知る上で貴重な史料である。長徳3年(997)から長保6年(寛弘元年、1004)にかけて、高麗漂流民などにかかわる記事を収録する。

2. 備考

①笹川種郎編・矢野太郎校訂『史料大成』続編35～36権記(内外書籍、1939年)。

②増補史料大成刊行会編『増補史料大成』4権記／5権記・水左記(臨川書店、1965年)。

③渡辺直彦・厚谷和雄校訂『史料纂集』57・82・106権記(統群書類従完成会、1978～96年)既刊3冊。

『左経記』

1. 内容

平安期の公卿源経頼(966～1039、極官参議、左大弁の経歴あり)の記録。長和5年(1016)から長元元年(1035)までの日記と『類聚雜例』との総称。原本は現存しないが、数多くの写本があり、国立公文書館所蔵内閣文庫本15冊がもつとも具備している。平忠常の乱に関する記事など、『小右記』とともに平安期の政治・文化史を知る上で有用な史料である。寛仁2年(1018)から同4年(1020)にかけて高麗関係記事があり、とりわけ寛仁3年(1019)の「刀伊の入寇」のさいの日本人捕虜の送還にかかわる記事が注目される。

2. 備考

①笹川種郎編『史料通覧』(日本史籍保存会、1915年)。

②笹川種郎編・矢野太郎校訂『史料大成』第4冊・左経記(内外書籍、1936年)。

③増補史料大成刊行会編『増補史料大成』第6冊・左経記(臨川書店、1965年)。

『薩戒記』

1. 内容

室町期の公卿中山定親(1401～1459、極官権大納言)の日記。現存する記事は、応永25年(1418)から嘉吉3年(1443)年におよぶ。東京大学史料編纂所所蔵本・京都大学附属図書館所蔵本・宮内庁書陵部所蔵本として原本が現存する。定親自身が有職故実に詳しくあったために、儀礼関係の記事を

多く含む。永享5年(1433)の朝鮮使節来日についての記事をおさめる。

2. 備考

- ①『大日本古記録』薩戒記(岩波書店、2001年～)既刊3冊。

『実隆公記』

1. 内容

室町戦国期の公卿三条西実隆(1455～1536)の日記。現存する記事は、文明6年(1474)から天文5年(1536)におよぶ。東京大学史料編纂所に三条西家旧蔵原本が所蔵されている。朝廷の儀式や動静、応仁・文明の乱で荒廃した京都の様子などを詳細に記す。室町後期から戦国時代にかけての政治史・社会史・文化史を知る上での一級史料である。延徳2年(1490)に日本国王使が朝鮮から帰国したことにかかわる記事がある。

2. 備考

- ①三条西公正校訂『実隆公記』(続群書類従刊行会・国書出版、1931～38年)既刊6冊(刊行途絶)。
 ②高橋隆三校訂『実隆公記』(続群書類従刊行会、1961～2001年、第1～10冊は①の第2刷、第11～20冊は第1刷)全20冊。

『山槐記』

1. 内容

平安・鎌倉期の公卿藤原忠親(1131～1195、中山家、極官内大臣)の日記。現存する記事は仁平元年(1152)から建久3年(1192)におよぶ。原本は現存しないが、数多くの古写本がある。平安末期から鎌倉初期にかけての政治的動乱を詳細に記す。永暦元年(1160)に高麗が日本の商人を拘束したことをしめす記事がある。

2. 備考

- ①笹川種郎編・矢野太郎校訂『史料通覧』(日本史籍保存会、1916～17年)3冊。
 ②笹川種郎編・矢野太郎校訂『史料大成』19-21山槐記(内外書籍、1934～35年)。
 ③増補史料大成刊行会編『増補史料大成』26-28山槐記(臨川書店、1965年)。

『小右記』

1. 内容

平安期の公卿藤原実資(957～1046、極官右大臣)の日記。もとは貞元2年(977)ごろから長元元年(1040)までの日記であったが、現在は天元5年(982)から長元5年(1032)までの部分が写本として伝存する。脱漏部分も多くあるが、『小記目録』(『小右記』の分類目録、全20巻、現存18巻)によってある

I. 中世

程度は補うことができる。豊富な内容をもつ古記録であり、当該期の政治・社会・文化を研究する際の最重要史料である。

日本—高麗外交にかかわる記事も多く、とりわけ寛仁3年(1019)の「刀伊の入寇」にかかわる記事がよく知られている。

2. 備考

- ① 笹川種郎編『史料通覧』小右記(日本史籍保存会、1915年)全2冊(未完)。
- ② 笹川種郎編・矢野太郎校訂『史料大成』小右記(内外書籍、1935～36年)全3冊。
- ③ 増補史料大成刊行会編『増補史料大成』別巻・小右記(臨川書店、1965年)全3冊。
- ④ 東京大学史料編纂所編『大日本古記録』小右記(岩波書店、1959～86年)全11冊。

『しやげんにちろく 蔗軒日録』

1. 内容

室町中期の禅僧季弘大叔(1421～1487)の日記。和泉堺海会寺住持であった文明16年(1484)から同18年(1486)にかけてのもの。原本は現存しないが、前田育徳会尊経閣文庫所蔵の写本がある。内容については、季弘が病弱であったことから、医療に関する記事が多い。また、観音信仰や神社参詣に関わる記事も多く含まれている。文明18年(1486)の大内政弘の使僧鉄牛西堂の朝鮮渡航についての記事がある。

2. 備考

- ① 東京大学史料編纂所編『大日本古記録』蔗軒日録(岩波書店、1953年)全1冊。

『しんじんいんかんぼくき 深心院関白記』

1. 内容

鎌倉期の公卿藤原基平(1246～1268、号深心院殿、極官関白、近衛家)の日記。記事は建長7年(1255)から文永5年におよぶ。内容は基平の公私にわたる動静をしるしたものである。文永5年のモンゴル・高麗からの外交文書をめぐる朝廷・院の対応についての記事がある。

2. 備考

- ① 陽明文庫編『岡屋関白記・深心院関白記・後知足院関白記』(陽明叢書6・記録文書編第2輯、思文閣出版、1984年)全1冊。
- ② 東京大学史料編纂所編『大日本古記録』深心院関白記(岩波書店、1996年)全1冊。

『すいさき 水左記』

1. 内容

平安期の公卿源俊房(1035～1121、極官左大臣)の日記。現存する記事は康平5年(1062)から天

仁元年(1108)におよぶ。宮内庁書陵部・前田育徳会尊経閣文庫に自筆原本の一部が現存している。内容は、前九年の役に関する記事および承暦4年(1080)の高麗からの医師派遣要請にかかわる朝廷内の議論の経過を詳細に記録している(該当記事は自筆原本あり)。

2. 備考

- ① 笹川種郎編『史料通覧』第5冊・水左記・帥記(日本史籍保存会、1914年)。
- ② 笹川種郎編・矢野太郎校訂『史料大成』第5冊・水左記・帥記(内外書籍、1936年)。
- ③ 増補史料大成刊行会編『増補史料大成』第8冊・水左記・帥記(臨川書店、1965年)。

『善隣国宝記』

1. 内容

古代・中世の対外関係をあつかう歴史書・往復外交文書集。瑞溪周鳳(1391～1473)の編著。文明2年(1470)成立。上巻は垂仁天皇88年(59)から明徳3年(1392)までの日中関係史を叙述したもの、中・下巻は応永5年(1398)から文明18年(1486)にかけての日明・日朝往復外交文書集である(瑞溪周鳳没後の補筆あり)。日明関係を研究する上での基本史料である。原本は現存しないが、明暦3年(1657)の京都出雲寺松栢堂刊木版本(流布本)のほか数種の写本がある。

2. 備考

- ① 『改訂史籍集覧』第21冊・新加通記類第4冊(近藤活版所、1901年)。
- ② 中島棟校訂『新訂善隣国宝記』(文求堂、1927年)。
- ③ 『善隣国宝記』(国書刊行会、1975年、影印本)。
- ④ 田中健夫編『善隣国宝記・新訂続善隣国宝記』(集英社、1995年)。

『善隣国宝後記』

1. 内容

中世・近世の日朝往復外交文書集。松隠玄棟編。正徳元年(1771)成立。天正18年(1590)から天和2年(1682)にかけての日朝往復外交文書を収録する。『善隣国宝後記』という題名は①～③に収録されるにあたって改題されたものであり、もとの題名は『続善隣国宝記』である。

2. 備考

- ① 『続群書類従』第37冊(続群書類従完成会、1972年)。

『善隣国宝別記』

1. 内容

中世・近世の往復外交文書集。編者・成立年代不詳。文明4年(1472)から明暦元年(1655)までの外交文書集であるが、外交文書よりも詩文・筆語を重点的に収録する。

I. 中世

2. 備考

- ①『続群書類従』第33冊下(続群書類従完成会、1928年、2版)。
- ②『続群書類従』第30冊上(続群書類従完成会、1932年、3版)。
- ③『続群書類従』第30冊上(続群書類従完成会、1957年、訂正3版)。

『ぞくしぐししやう続史愚抄』

1. 内容

朝廷の事蹟をまとめた編年体の歴史書。柳原紀光編。寛政10年(1798)成立。収録年代は正元元年(1259)から安永8年(1779)におよぶ。草稿本・初稿本・中清書本・清書本および最終清書本(未完)がある。記載内容は天皇の動静や朝儀から災害など幅広い。各記事は簡略ではあるが、その典拠が示されており、信頼性は高い。嘉吉3年(1443)の朝鮮通信使来日にかかわる記事をおさめる。

2. 備考

- ①『続国史大系』第1～3冊・続史愚抄(経済雑誌社、1902年)。
- ②『新訂増補国史大系』第13～15冊・続史愚抄(国史大系刊行会・吉川弘文館・日用書房、1930～1931年)。

『ぞくぜんりんこくほうき続善隣国宝記』

1. 内容

中世・近世の往復外交文書集。松隠玄棟編。正徳元年(1711)成立。文明5年(1473)から万治3年(1660)にかけての明・朝鮮・琉球・東南アジアとの往復外交文書を収録する。

2. 備考

- ①近藤瓶城編『改訂史籍集覧』第21冊・新加通記類第4冊(近藤活版所、1901年)。
- ②角田文衛・五来重編『新訂増補史籍集覧』第27冊(臨川書店、1967年)。
- ③田中健夫編『善隣国宝記・新訂続善隣国宝記』(集英社、1995年)。

『ぞくぜんりんこくほうがいき続善隣国宝外記』

1. 内容

中世・近世の往復外交文書集。編者・成立年代不詳。文明5年(1473)から延宝3年(1675)にかけての明・朝鮮・琉球・東南アジアとの往復外交文書を収録する。『続善隣国宝記』と親本を同じくするが、収録文書に若干の異同がある。原本は現存しないが、神宮文庫本・宮内庁書陵部本・国立公文書館内閣文庫本がある。

2. 備考

- ①近藤瓶城編『改訂史籍集覧』第21冊(近藤活版、1901年)。

②角田文衛・五来重編『新訂増補史籍集覧』第27冊(臨川書店、1967年)。

『そまき帥記』

1. 内容

平安期の公卿源経信(1016～1097、極官大納言兼大宰権帥)の日記。治暦元年(1065)から寛治2年(1088)までの記事が残存する。原本は現存しないが、数多くの写本がある。『水左記』と対比することで、多くの知見を得る。承暦4年(1080)から永保元年(1081)にかけて、高麗の医師派遣要請についての議論の経過を詳細に記録している。

2. 備考

- ①笹川種郎編『史料通覧』第11冊(日本史籍保存会、1916年)。
- ②笹川種郎編・矢野太郎校訂『史料大成』統編5水左記・帥記(内外書籍、1936年)。
- ③増補史料大成刊行会編『増補史料大成』(臨川書店、1965年)第5冊権記・帥記。

『だいえいきょうろく の ころごじょうならびにしよじょうのあとづけ大永享禄之比御状并書状之跡付』

1. 内容

16世紀の対馬宗氏が周辺の大名や国人に発給した文書の控え。享禄元年(1528)の宗盛賢書状から、16世紀後半の宗義調書状まで、324通の文書を収める。宗氏と周辺の大名・国人との交流を示す史料であるが、朝鮮関係の文書も含んでいる。この史料に続く同様の史料として、「諸家引着」(西村圭子「対馬宗氏の『諸家引着』覚書」『日本女子大学文学部紀要』34、1984年)がある。

2. 備考

田中健夫『対外関係と文化交流』(思文閣出版、1982年)。

『だいにじょういんじしやざうじき大乘院寺社雑事記』

1. 内容

室町・戦国期の興福寺大乘院門跡の日記。第17代尋尊(1430～1508)および第28代政覚・第30代経尋の日記を総称したもの。尋尊日記の現存する記事は、康正2年(1456)から永正5年(1508)年におよぶ。国立公文書館内閣文庫所蔵原本がある。大乘院関係の記事が多く、当該期の奈良の情勢を知る上で大変貴重な史料である。また、室町幕府の動静についても詳細な記述が見え、『蔭涼軒日録』とともに、当該期の政治史研究において一級の史料である。寛正4年(1463)に朝鮮から「観音現相記」がもたらされたことをしめす記事があり、朝鮮世祖即位後の仏教的奇瑞現象の一環として注目される。

2. 備考

- ①辻善之助編『大乘院寺社雑事記』(三教書院、1931～36)全12冊。
- ②辻善之助編『大乘院寺社雑事記』(角川書店、1964年)全12冊、①の複製版。

- ③竹内理三編『増補続史料大成』第26～37冊・大乘院寺社雑事記(臨川書店、1978年、2001年に普及版)、①の複製版。

『たいへいき太平記』

1. 内容

南北朝期の動乱をあつかう軍記物。作者は小島法師とも恵鎮・玄恵ともいう。暦応年間(1338～41)までに原作が成立し、永和年間(1375～78)までに現存のかたちに編集された。写本・古活字本(慶長15年(1610)刊)・整版本があり、室町期の古写本としては今川家本(『参考太平記』所引)・宝徳本・前田育徳会尊経閣文庫所蔵梵舜本があり、祖型をつたえる写本としては穂久邇文庫所蔵神田本・尊経閣文庫所蔵玄玖本・南都本・西源院本がある。「高麗人来朝事」として貞治6年(1367)の高麗使節の来日にふれた部分があり、征東行中書省の咨文を収録する。

2. 備考

- ①国書刊行会編刊・黒川真道校訂『太平記 神田本』(1907年)全1冊。
 - ②国民図書株式会社編『校註日本文学大系』第17～18冊(国民図書、1925-1928年)全2冊。
 - ③鷲尾順敬校訂『太平記 西源院本』(刀江書院、1936年)全1冊。
 - ④後藤丹治校注『太平記』(日本古典文学大系34～36、岩波書店、1960～1962年)全3冊。
 - ⑤『太平記 梵舜本』(古典文庫、1965～1967年、複製本)全9冊。
 - ⑥『太平記 神田本』(古典研究会叢書、古典研究会・汲古書院、1972年、影印本)全2冊。
 - ⑦前田育徳会尊経閣文庫編・刊『太平記 玄玖本』(勉誠社、1973～1975年、影印本)全5冊。
 - ⑧岡見正雄校注『太平記』(角川書店、1975～1982年)全2冊。
 - ⑨高橋貞一校訂『新校太平記』(思文閣、1976年)全2冊。
 - ⑩山下宏明校注『太平記』(新潮日本古典集成、新潮社、1977～1988年)全5冊。
 - ⑪長谷川端校注・訳『太平記』(新編日本古典文学全集54～57、小学館、1994～1998年)全4冊。
- ①の底本は神田本、②・⑧の底本は元和片仮名本、③の底本は西源院本、④の底本は古活字本、⑤は梵舜本の複製本、⑥は神田本の影印本、⑦は玄玖本の影印本、⑨の底本は①『太平記 神田本』のうち、増補された部分を消去したもの、⑩の底本は慶長8年(1603)古活字本、⑪の底本は水府明德会彰考館所蔵天正本である。

『だざいふしし こだいしりょうへん ちゅうせいしりょうへん太宰府市史』古代資料編・中世資料編

1. 内容

古代・中世の大宰府や太宰府天満宮及び太宰府市域に関する編年の史料集。各史料の積文の他、読み下し・注釈・解説を付す。大宰府は古代国家の外交を担い、大宰府に拠点を置いた中世の少弐氏(武藤氏)も外交・貿易と関係が深かったため、対外関係史料を多く収録する。対高麗外交や蒙古襲来、対朝鮮外交に関する史料も収める。

2. 備考

太宰府市史編集委員会編。太宰府市刊。古代資料編は2003年、中世資料編は2002年の刊行。

『大宰府・太宰府天満宮史料』

1. 内容

古代～中世の大宰府および太宰府天満宮(安楽寺)にかかわる編年史料集。収録範囲は536年から慶長4年(1599)におよぶ。網文を挙げ、関係史料を網羅的に配列している点で、『大日本史料』と同様な体裁をとる。古代・中世における九州の地域史および対外関係史研究において必須の史料集である。

2. 備考

- ①九州文化総合研究所大宰府調査文献班編・刊『大宰府・太宰府天満宮史料』(1954～1958年、上世編10冊・中世編8冊・続中世編8冊)。
- ②竹内理三編『大宰府・太宰府天満宮史料』(太宰府天満宮刊、1964～2006年、本編17冊、補遺1冊)。
- ②は、第12巻より川添昭二が編纂に加わった。

『中国・朝鮮の史籍における日本史料集成』

1. 内容

中国・朝鮮半島の正史・実録等から日本及び琉球に関する史料を抽出した史料集。①の『正史之部』は二十五史及び『清史』から日本・琉球関係史料が抽出されている。②『明実録之部』、③『清実録之部』は、明清史研究の基本史料である『明実録』『清実録』から日本・琉球関係史料が抽出されている。④『三国高麗之部』は『三国史記』『三国遺事』『高麗史』『高麗史節要』から朝鮮と倭・日本及び琉球との関係を示す史料が抽出されている。⑤『李朝実録之部』は『朝鮮王朝実録』(李朝実録)から日本・琉球関係史料が抽出されている。いずれも日本の対外関係史研究にとって重要かつ便利な史料集である。

巻の構成は以下の通りである。

- ①『正史之部』(一)～(二) 2冊 1976～1979年刊
- ②『明実録之部』(一)～(三) 3冊 1975年刊
- ③『清実録之部』(一)～(二) 2冊 1976年刊
- ④『三国高麗之部』 1冊 1978年
- ⑤『李朝実録之部』(一)～(十二) 1976～2007年刊

「日本・琉球の政治・社会・経済・文化等に関する記事、及び李朝と日本・琉球との交流に関する記事、並びに李朝の日本に対する政事・軍事・経済上の施策と施設に関する記事等」が採録されている(凡例)。記事に若干の遺漏があるが、中近世日朝関係史研究にとって基礎史料ともいえる史料集で

I. 中世

ある。『海東諸国紀』や日本側史料と対照することによって、さらに本史料集の価値は高まるものと考えられる。

以下、『李朝実録之部』全12巻の巻毎の年代を示す。

- (一) 至元18年(1281)～世宗18年(1436)3月
- (二) 世宗18年(1436)4月～世祖5年(1459)12月
- (三) 世祖6年(1460)正月～成宗10年(1479)5月
- (四) 成宗10年(1479)6月～成宗25年(1494)11月
- (五) 燕山君零年(1494)12月～中宗12年(1517)4月
- (六) 中宗12年(1517)5月～中宗37年(1542)3月
- (七) 中宗37年(1542)4月～明宗22年(1567)5月
- (八) 宣祖零年(1567)12月～宣祖25年(1592)12月
- (九) 宣祖26年(1593)正月～7月
- (十) 宣祖26年(1593)8月～宣祖27年(1594)6月
- (十一) 宣祖27年(1594)7月～宣祖28年(1595)7月
- (十二) 宣祖28年(1595)8月～宣祖29年(1596)12月

2. 備考

日本史料集成編纂会編。国書刊行会刊。1975～2007年。

日麗・日朝関係史に限定すると、以下の田村洋幸氏編の史料集4冊が本史料集に先行する。

- ① 田村洋幸編『麗日編年史料集』(韓国史料研究所、1967年)。
- ② 同編『海寇資料集』(峯書房、1967年)。
- ③ 同編『太祖・定宗・太宗実録日朝関係編年史料』(三和書房、1967年)。
- ④ 同編『世宗実録日朝経済史料』(恒星社厚生閣、1968年)。

『朝鮮王朝実録』から琉球関係史料を抽出し、訳注を加える作業は、嘉手納宗徳氏や和田久徳氏等によってなされていたが、近年、池谷望子・内田晶子・高瀬恭子編・訳『朝鮮王朝実録琉球史料集成』(榕樹書林、2005年)が刊行された。

『中右記』

1. 内容

平安期の公卿藤原宗忠(1062～1141、中御門家、極官右大臣)の日記。現存する記事は、寛治元年(1087)から保延4年(1138)におよぶ。原本は現存しないが、近衛家・九条家・柳原家・伏見宮家本の鎌倉期の古写本をはじめ、数多くの写本がある。宗忠が有識家としての名声を高めていたこともあり、有職故実を研究する上で貴重な史料である。寛治6年(1092)から天仁元年(1108)にかけて高麗関係記事がある。

2. 備考

- ① 笹川種郎編『史料通覧』(日本史籍保存会、1915～16年)7冊。

② 笹川種郎編・矢野太郎校訂『史料大成』8～14中右記(内外書籍、1934～35年)7冊。

③ 宮内省図書寮編『中右記』(宮内省図書寮善本叢刊2、美術書院、1945年)巻軸1巻、
解説あり。

④ 増補史料大成刊行会編『増補史料大成』9～15中右記(臨川書店、1965年)7冊。

⑤ 天理図書館善本叢書編集委員会編『中右記』(天理図書館善本叢書和書之部57、1984年)。

⑥ 東京大学史料編纂所編『大日本古記録』中右記(岩波書店、1993年～)。

①・②・④の底本は村上勘兵衛献本に近衛家本・二条家本を補写したもの、③は宮内庁書陵部所蔵本(柳原家本を図書寮に寄贈)、⑤は天理図書館所蔵本、⑥の底本は近衛家本・九条家本・伏見宮家本・柳原家本などの諸本である。

『朝鮮送使国次之書契覚』

1. 内容

16世紀の対馬の史料。①「宗左衛門大夫覚書」と②「印冠之跡付」の2種類の史料からなる。前者は、対馬豊崎郡大浦の大浦左衛門大夫が、永正7年(1510)の三浦の乱から同9年の壬申約条成立までの顛末を記した覚書。三浦の乱の推移と乱後の関係修復交渉の実態がわかる。後者は、元龜3年(1572)から天正14年(1586)までの対馬宗氏の朝鮮通交に関する記録。対馬によって独占されていた朝鮮貿易の実態がわかる史料であり、16世紀末の重要な日朝関係史料である。

2. 備考

① 田中健夫校訂『九州史料叢書三 朝鮮送使国次之書契覚』(九州史料刊行会、1955年)。

② 田中健夫『対外関係と文化交流』(思文閣出版、1982年)。

『朝野群載』

1. 内容

平安後期の詩文・文書集。三善為康編。白河院政期(11世紀後半)ごろの詩文・文書を中心に約600編が収録されており、永久4年(1116)の成立であるが、同年以降のものも増補されている。平安後期の行政や文書の実態を知る上で貴重な書である。全30巻のうち21巻が現存しており、巻20の異国条に日本—高麗間の外交文書が収録されている。

2. 備考

① 近藤瓶城編『改訂史籍集覧』第18冊・校本朝野群載(近藤活版所、1901年)。

② 黒板勝美・国史大系編修会編『新訂増補国史大系』第29冊上・朝野群載(吉川弘文館、1964年)。

①の底本は伴信友校本、②の底本は猪熊信雄氏所蔵本および神宮文庫所蔵旧宮崎文庫本である。

『帝王編年記』

1. 内容

神代から南北朝期までをあつかう年代記。編者は僧永祐という。14世紀後半の成立。神代から後光厳天皇在位期(1352～1371)もしくは後円融天皇在位期(1371～1382)におよぶ年代記であったが、現存する記事は後伏見天皇在位期(1299～1301)までである。先行する歴史書をもとに編纂されたものであるが、本書でしか知られない記事もある。原本は現存しない。仁治元年(1240)から弘安2年(1279)にかけて、日本朝廷の対高麗外交やモンゴル襲来にかかわる記事をおさめる。

2. 備考

- ①『新訂増補国史大系』第12冊・扶桑略紀・帝王編年紀(国史大系刊行会・吉川弘文館・日用書房、1932年)。

『貞信公記』(貞信公記抄)

1. 内容

平安期の公卿藤原忠平(880～949、諡号は貞信、極官は摂政・関白・太政大臣)の日記。現在、延喜7年(907)から天曆2年(948)までの部分が抄本として伝存する。内容は朝儀や政務に関わるものが多く、当該期の政情を知る上で貴重な史料である。天慶2年(939)から同3年(940)にかけて、高麗からの外交文書の処理をめぐる記事がみえる。

2. 備考

- ①『続々群書類従』第5巻・記録部(国書刊行会、1909年)。
 - ②東京大学史料編纂所編『大日本古記録』貞信公記(岩波書店、1956年)全1冊。
 - ③天理図書館善本叢書編集委員会編『貞信公御記抄・九条殿御記』(天理図書館善本叢書 和書之部42、1980年)全1冊。
- ①の底本は国立公文書館内閣文庫本、②の底本は天理図書館所蔵九条家本・京都大学附属図書館所蔵平松本、③は天理図書館所蔵九条家本の影印本である。

『豊玉町の古文書(中世文書)』

1. 内容

対馬市豊玉町所在の中世文書を収録する。長岡家文書・仁位家文書・梅野家文書・平山家文書など、22家の家文書を収める。日朝関係史料を含む。寺社の棟札銘・墓碑銘・梵鐘銘の他、観音寺所蔵「観音菩薩坐像」(高麗時代)納入結縁文・東泉寺所蔵「大方広仏華嚴経」(元版)奥書を付す。

2. 備考

- 豊玉町教育委員会編・刊。1995年。

『長崎県史』史料編 第一

1. 内容

近世対馬藩で編纂された古文書集である「宗家御判物写」を収録する。九州大学九州文化史研究所所蔵写本を底本にして、計30冊・2529通の古文書を収める。対馬の中世文書史料集の代表であり、多くの中世日朝関係史料を含んでいる。

2. 備考

長崎県史編纂委員会編。吉川弘文館刊。1963年。

『長門二ノ宮忌宮神社文書』

1. 内容

長門忌宮神社(山口県下関市長府)の関係史料集。「忌宮古文書」のなかに、永和4年(1378)に大内義弘が倭寇討伐軍を高麗に派遣したことをしめす古文書がある。

2. 備考

田村哲夫編。忌宮神社刊。1977年。

『日本紀略』

1. 内容

神代から後一条朝(1017～1036)までをあつかう編年体の歴史書。34巻。編者・成立年代不詳。「六国史」および『新国史』『外記日記』の抄出からなるが、「六国史」の欠落・削除部分をおぎなう記事もある。特に、『日本後紀』の原形をうかがい得る史料として、史料的価値が高い。延喜6年(906)から長元4年(1034)にかけて、高麗建国前後の新羅・渤海・高麗関係記事をおさめる。

2. 備考

①『国史大系』第5冊・日本紀略(経済雑誌社、1897年)。

②『新訂増補国史大系』第10冊・日本紀略、第11冊・日本紀略・百練抄(国史大系刊行会・吉川弘文館・日用書房、1929年)。

『後鑑』

1. 内容

室町幕府の事蹟をまとめた編年体の歴史書。編者は江戸幕府の儒臣成島良譲ほか。嘉永6年(1853)成立。収録年代は元弘元年(1331)から慶長2年(1597)におよぶ。原本は大正12年(1923)の関東大震災で焼失した。内容は、将軍の事蹟から管領・四職・奉行などの動向や九州の情勢、明・朝鮮・琉球との対外関係に至るまで、多岐に渡っている。嘉吉3年(1443)の朝鮮通信使来日や永正10年(1513)の「高麗船勘合」などにかかわる記事をおさめる。

I. 中世

2. 備考

- ①『続国史大系』第6～8冊・後鑑(経済雑誌社、1902～1904年)。
- ②『新訂増補国史大系』第34～37冊・後鑑(国史大系刊行会・吉川弘文館・日用書房、1932～1934年)。

『八幡愚童訓』

1. 内容

八幡神の神徳をたたえた歴史書・教義書。著者は、石清水八幡宮の社僧。鎌倉期(14世紀初期)の成立。本書には二系統の写本があり、第一類は延慶元年(1308)から文保2年(1318)以前の成立であり、「神功皇后伝説」「文永・弘安の役」などの八幡神にまつわる伝説・歴史を著述したもので、文永・弘安の役における元・高麗軍の動向をしるした部分がある。なお、第一類にはさらに二系統があり、甲には文永の役の記述が少なく、乙にはその具体的な記述がある。第二類は正安年間(1299～1302)ごろの成立であり、八幡神と阿弥陀仏との神仏習合を説いた教義書である。

2. 備考

- ①『群書類従』第1冊(経済雑誌社、1893年、再版1898年)。
- ②『続群書類従』第2冊上(続群書類従完成会、1902年、訂正3版1957年)。
- ③『群書類従』第3冊(続群書類従完成会、1933年、訂正3版1960年)。
- ④『日本思想大系』第20冊(岩波書店、1975年)。
- ⑤大久保正編『国文学未翻刻資料集』(桜楓社、1981年)。

『晴豊記』

1. 内容

戦国期～江戸初期の公卿勸修寺晴豊(1544～1601、極官准大臣)の日記。現存する記事は天正6年(1578)から文禄3年(1594)におよぶ。京都大学文学部博物館・国立公文書館内閣文庫所蔵原本(勸修寺家旧蔵)がある。日記は毎日欠かさず書かれたものではなく、1～2日分しか書かれていない月もある。内容は必ずしも具体的ではないが、晴豊の身分的性格から、朝廷や信長・秀吉関係の記事に見るべきものが多い。

2. 備考

- ①竹内理三編『続史料大成』第9冊・晴右記・晴豊記(臨川書店、1967年)。
- ②竹内理三編『増補続史料大成』第9冊・晴右記・晴豊記(臨川書店、1978年)。

『百練抄』

1. 内容

平安・鎌倉期をあつかう編年体の歴史書。編者不詳。亀山天皇在位期(1259～1274)の成立とされる。貴族の記録類をもとに編纂されたものであるが、本書でしか知られない記事もある。現存する記事は安和元年(968)から正元元年(1259)におよぶ。原本は現存しない。天禄3年(972)から仁治元年(1240)にかけて、対高麗外交にかかわる記事をおさめる。

2. 備考

①『国史大系』第14冊・百鍊抄・愚管抄・元亨釋書(経済雑誌社、1901年)。

②『新訂増補国史大系』第11冊・日本紀略・百鍊抄(国史大系刊行会・吉川弘文館・日用書房、1929年)。

①の底本は塙保己一校本、②の底本は神宮文庫本である。

『平戸市史』歴史史料編Ⅰ

1. 内容

中世の平戸に関する古文書を収録する。松浦文書・伊万里文書・石志文書・籠手田文書・「松浦文書類」等を収める。中世松浦党に関する史料集であり、16世紀後半の平戸松浦氏と対馬宗氏の関係を示す史料や後期倭寇関係文書、文禄・慶長の役関係文書などがある。

2. 備考

平戸市史編さん委員会編。平戸市刊。2001年。

『広島県史』古代中世資料編Ⅲ

1. 内容

厳島神社関係文書を収録する。大願寺文書の中に、大内義隆書契案写(1536年)、「尊海渡海日記」・礼曹参判書契(1539年)、大蔵経目録口書写(尊海、1545年)などの朝鮮関係史料がある。「尊海渡海日記」は、大願寺僧尊海が天文8年(1539)に大蔵経求請のために朝鮮に渡海した時の日記であり、16世紀中期の日朝関係史料として貴重である。

2. 備考

広島県編・刊。1978年。

『伏敵編』

1. 内容

第1冊は文応元年(1266)から嘉吉3年(1443)にかけての対外関係史料集であり、蒙古襲来関係史料が中心であるが、多くの日韓関係史料(高麗・朝鮮)を収録する。第2冊の「靖方溯源」は、神代から文応元年までの対外関係史料集であり、その期間の日麗関係史料のほか、「竹崎季長絵詞」(蒙古襲来絵詞)も収録する。

I. 中世

2. 備考

重野安繹監修・山田安栄編。吉川半七刊。1891年(訂正再版1892年)。

『武家年代記』

1. 内容

平安末期から戦国期までをあつかう年代記。編者不詳。花園天皇期(1308～1311)に原型が成立して後世に加筆されたもの。現存する記事は治承4年(1180)から明応8年(1499)におよぶ。原本は現存せず、柳原家本(1797年写本)が唯一の写本である。公武双方にわたって記述がなされており、注目される。文永3年(1266)から建治4年(1278)にかけて蒙古襲来にかかわる記事があり、裏書には嘉吉3年(1443)の朝鮮通信使の来日についての簡略な記事がある。

2. 備考

①『統国史大系』第5～6冊・吾妻鏡(経済雑誌社、1902年)付録。

②『増補続史料大成』第51冊・鎌倉年代記・武家年代記・鎌倉大日記(臨川書店、1979年)。

『扶桑略記』

1. 内容

神代から平安期までをあつかう編年体の歴史書。編者は比叡山僧皇円とされる。現存する記事は神代から嘉保元年(1094)におよぶ。先行する歴史書・仏教書をもとに編纂されたものであるが、本書でしか知られない記事もあり、史料的价值は高い。原本は現存しないが、国立歴史民俗博物館所蔵広橋家本・天理図書館所蔵金勝院本・真福寺本・小川広巳所蔵本(いずれも鎌倉期の古写本)をはじめとして数多くの写本がある。寛平6年(894)から永承3年(1048)にかけて、高麗建国前後の新羅・渤海関係記事をおさめる。

2. 備考

①『史籍集覧』校本扶桑略記(近藤瓶城、1884年)。

②『改訂史籍集覧』第1冊・校本扶桑略記(近藤活版所、1900年)。

③『国史大系』第6冊・日本逸史・扶桑略記(経済雑誌社、1897年)。

④『新註皇学叢書』第6冊(広文庫刊行会、1927年)。

⑤『新訂増補国史大系』第12冊・扶桑略紀・帝王編年紀(国史大系刊行会・吉川弘文館・日用書房、1932年)。

⑥天理図書館善本叢書和書之部編集委員会編『古代史籍続集』(天理図書館善本叢書和書之部13、天理大学出版部、1975年)。

『平安遺文』

1. 内容

平安期(古代・中世前期)の古文書・金石文・題跋を網羅的に収録した編年史料集であり(例外的に除外された史料もある)、日麗関係史料も収める。収録範囲は天応元年(781)から文治元年(1185)におよぶ。古文書編11冊・金石文編1冊・題跋編1冊・索引編2冊。

2. 備考

竹内理三編。東京堂出版刊。1949～1968年(新訂版は、1974～1981年)。

『平戸記』

1. 内容

鎌倉期の公卿平経高(1180～1255、極官参議)の日記。現存する記事は安貞元年(1227)から寛元4年(1246)におよぶ。原本は現存しない。内容は、公武関係から土地・訴訟制度に至るまで多岐に渡り、法制史的意義も大きい。また、仁治3年(1242)の記事が残るが、この年は『吾妻鏡』が欠落しているため、本史料の価値は高い。延応2年(1240)の高麗からの外交文書(進奉船問題)をめぐる朝廷内の議論の経過が記録され、泰和6年(1206)の高麗国金州防禦使牒写も収録されている。

2. 備考

①笹川種郎編・矢野太郎校訂『史料大成』24平戸記(内外書籍、1935年)。

②増補史料大成刊行会編『増補史料大成』32平戸記33平戸記・妙槐記(臨川書店、1965年)。

『碧山日録』

1. 内容

室町期の東福寺僧太極の日記。現存する記事は長禄3年(1459)から応仁2年(1468)におよぶ。原本は現存しないが、前田育徳会尊経閣文庫所蔵の古写本がある。応仁・文明の乱前後の社会情勢や寺院経済について詳細な記事を見る。寛正元年(1460)から同3年(1462)にかけて朝鮮に化縁をもとめる禅僧についての記事を収める。

2. 備考

①『改訂史籍集覧』第25冊(近藤出版部、1902年)。

②『新訂増補史籍集覧』第26冊(臨川書店、1967年)。

③竹内理三編『増補続史料大成』第20冊・碧山日録(1982年)。

『本朝世紀』

1. 内容

平安期をあつかう歴史書。藤原通憲編。鳥羽法皇が通憲に「六国史」の後継版(宇多～近衛天皇)

I. 中世

の編纂を命じたものであり、現存する記事は承平5年(935)から仁平3年(1153)におよぶ。外記局の公日記である『外記日記』を基本史料とするが、手を加えられた部分も多い。

2. 備考

①『群書類従』第3冊(経済雑誌社、1893年、再版1898年)。

②『群書類従』第3冊(続群書類従刊行会、1933年、訂正3版1960年)。

③『国史大系』第8冊(経済雑誌社、1898年)。

④『新訂増補国史大系』第9冊(国史大系刊行会・吉川弘文館・日用書房、1933年、再版1964年)。

①・②の底本は尊経閣文庫本の系統をひく抄本であり、③の底本は伴信友校本・柳原本および諸本、④の底本は伏見宮家本・東京大学所蔵本である。

『ほんちようぞくもんずい本朝統文粹』

1. 内容

平安後期の漢詩文集。編者未詳。全13巻。後一条天皇代から崇徳天皇の保延6年(1140)までの作品322篇を収める。成立は永治元年(1141)～久寿2年(1155)とされる。文永9年(1272)に北条実時が相州御本によって校了した写本(金沢文庫本、複製あり)が内閣文庫に残る。その他、多くの写本が残るが、そのほとんどは江戸時代のものである。内容は、『本朝文粹』に比べると文章の格調においてやや劣るが、平安後期の文学および思想を知る上で貴重な史料である。

2. 備考

①『正統本朝文粹 全』(国書刊行会、1918年、1944復刊)。

②『校註日本文学大系』第24巻(国民図書株式会社、1927年、第2版1928年、第3版1930年)。

③『新訂増補国史大系』第29巻下(国史大系刊行会・吉川弘文館・日用書房、1938年、第2版1941年、完成記念版1965年)。

①・③の定本は金沢文庫本、②の定本は明治29年(1896)6月の木活字本である。

『まつらとうかんけいしりょうしゅう松浦党関係史料集』

1. 内容

長和5年(1016)以後の肥前松浦党に関する編年史料集。現在4巻刊行。松浦地方はいわゆる「初期倭寇」や前期倭寇の根拠地のひとつであるため、高麗関係の史料が比較的多い。第4巻は、『朝鮮王朝実録』から松浦党関係史料を多数収めている。

2. 備考

瀬野精一郎編。続群書類従完成会刊。1996～2009年。第4巻から編者に村井章介が加わり、八木書店からの刊行となった。

『満濟准后日記』

1. 内容

室町期の醍醐寺僧三宝院満濟(1378～1435)の日記。現存する記事は応永18年(1411)から永享7年(1435)におよぶ。国立国会図書館および醍醐寺三宝院所蔵の原本がある。将軍に近侍する護持僧として、幕政に関する詳細な記述を記す。本史料は、満濟自身が直接見聞した事柄が記されており、室町前期の政治史を研究する上での基本史料である。正長元年(1428)の朝鮮使節の来日についての記事をおさめる。

2. 備考

- ①京都帝国大学文科大学編『満濟准后日記』(六條活版製造所、1918～1920年)全3冊。
- ②統群書類従完成会編・刊『統群書類従』補遺2(1958～1959年)全2冊。
- ①の底本は京都大学文学部所蔵本、②の底本は醍醐寺所蔵原本である。

『民経記』

1. 内容

鎌倉期の公卿藤原経光(1212～1274、勘解由小路家・広橋家、極官民部卿)の日記。現存する記事は嘉禄2年(1226)から文永7年(1270)におよぶ。国立歴史民俗博物館所蔵自筆原本48巻があるほか、数多くの写本がある。経光が五位蔵人に在職していた寛喜3年(1231)・貞永元年(1232)・天福元年(1233)の三年分の記事が詳細であり、彼の蔵人としての活動状況がよく分かる。嘉禄2年(1226)から安貞元年(1227)にかけて「初期倭寇」にかかわる記事を収録する。

2. 備考

- ①近藤瓶城編『改訂史籍集覧』第24冊(近藤出版部、1902年)。
- ②東京大学史料編纂所編『民経記』全11冊、既刊10冊(岩波書店、1975年～)。
- ①の底本は東京大学所蔵本であり、「経光卿記」の題名で収録する。②の底本は東洋文庫所蔵原本および諸本である。

『宗像神社文書』第1巻

1. 内容

本編1冊・影印本1冊。福岡県宗像市にある宗像大社が所蔵する中世文書のうち、「八巻文書」と断簡文書の計230点を収める。享徳3年(1457)の宗像氏正書契案を収録する。

2. 備考

- 宗像大社文書編纂刊行委員会編。宗像大社復興期成会刊。1992年。

『めいげつき明月記』

1. 内容

平安期の公卿藤原定家(1162～1241、冷泉家)の日記。もともと治承年間(1177～1179)から仁治年間(1240～1242)までの記事を収録していたが、現在は治承4年(1180)から嘉禎元年(1235)までの部分が残存する。冷泉家時雨亭文庫所蔵原本(1192～1233)があり、写本も数多い。定家のほぼ全生涯に渡る記録であり、彼自身の内面を知る上で重要な史料であるとともに、当該期の宮廷や公家社会の実相を伝える史料としても注目される。嘉禄2年(1226)から安貞元年(1227)にかけて、「初期倭寇」にかかわる記事を収録する。

2. 備考

①国書刊行会編・刊『明月記』(1911～1912年、復刻版1970年)全3冊。

②辻彦三郎校訂『史料纂集』古記録編18明月記(統群書類従完成会、1971年)既刊1冊。

③冷泉家時雨亭文庫編『明月記』(冷泉家時雨亭叢書56～60、朝日新聞社、1993～2003年)全5冊。

④尾上陽介編『明月記・徳大寺家本』(ゆまに書房、2004～2006年)全41冊(8巻)。

①の底本は東京大学史料編纂所謄写本、②の底本は冷泉家時雨亭文庫所蔵原本および諸本、③は原本の影印本、④は史料編纂所所蔵徳大寺家本の二色刷版である。

『もろもりき師守記』

1. 内容

南北朝期中級貴族中原師守(極官大外記)の日記。現存する記事は暦応2年(1339)から応安7年(1374)におよぶ。国立国会図書館所蔵原本のほか、数多くの写本がある。北朝における朝儀や公事について多くの記述を残す。また、彼自身が大炊頭であったことから、大炊寮領の経営についても豊富な記述を見る。貞治6年(1367)の高麗使節(金龍)の来日に際し、朝廷内での議論に資するため、大外記の職務として平安・鎌倉期の外交文書・記録類を多く検出し、これを日記のなかに書写している。

2. 備考

①藤井貞文・小林花子校訂『史料纂集』古記録編2・5・9・15・21・25・37・40・44・49・63師守記(統群書類従完成会、1968～1982年)全11冊。

『やすとみき康富記』

1. 内容

室町期の明法家中原康富(1400～1457、極官権大外記)の日記。現存する記事は応永24年(1417)から康正元年(1455)におよぶ。国立国会図書館所蔵原本がある。当該期の公家社会の実態や室町幕府の動静についての詳細な記述がある。15世紀前半の政治・経済・社会・文化史における重要史料

の一つである。嘉吉3年(1443)の朝鮮通信使来日や宝徳元年(1449)の日本国王使派遣に関する詳細な記事を収める。

2. 備考

- ① 笹川種郎編・矢野太郎校訂『史料大成』29～31康富記32康富記・親長卿記別記(内外書籍、1936～42年)。
- ② 増補史料大成刊行会編『増補史料大成』37～39康富記、40康富記・親長卿記別記(臨川書店、1965年)。

『山口県史』史料編中世1～4

1. 内容

中世の山口県に関する史料集。第1巻は記録史料類を収録し、第2～4巻は個別の家文書と画幅賛・文学資料を収録する。地理的に大陸に近く、また大名大内氏が対外関係に深く関わったこともあり、蒙古襲来や高麗・朝鮮との関係を示す史料も多く収録されている。

2. 備考

山口県編・刊。1996～2008年。

『隣交徴書』

1. 内容

中国魏朝から清朝にかけての詩文から日本関係のものを抄録した書物。編者は豊前の儒者伊藤松。天保9年(1838)～同10年(1839)刊。明・清時代の僧侶や儒者の詩文が大半を占める。日中関係史料が中心であるが、日韓関係史料(高麗・朝鮮・文禄慶長の役)として利用できるものもある。

2. 備考

『隣交徴書』(国書刊行会、1975年、影印本)。

『歴代鎮西志』

1. 内容

神代から正保4年(1647)までの北部九州の政治・軍事をまとめた編年体の歴史書。犬塚盛純編。元禄年間(1688～1703)成立。原本は現存しない。日韓関係(高麗・朝鮮・文禄慶長の役)に言及した記事がある。

2. 備考

高野和任編『歴代鎮西志』(新潮社、1992～1995年、影印本)全3冊。

『歴代鎮西要略』 れきだいちんせいようりやく

1. 内容

『歴代鎮西志』の要約版。収録年代は神代から文禄2年(1593)までである。編者・成立年代不詳。水府明德会彰考館所蔵原本があり、これを底本とした東京大学史料編纂所所蔵写本がある。九州北・西部における戦乱を中心として年代順に配列。文治年間(1185～1190)以降は年号ごとにまとめられ、文書等も盛り込まれている。これらの中には現存しないものも含まれており、貴重である。

2. 備考

- ①『史籍集覧』歴代鎮西要略(和装本、1883年)全11冊。
- ②芥川龍男増補校訂『歴代鎮西要略』(文献出版、1976年)全2冊。

『歴代宝案』 れきだいほうあん

1. 内容

琉球王国の外交文書集。一集・二集・三集・咨集・別集にわかれ、仁宗元年(1424)から同治6年(1867)にかけて琉球が明清・朝鮮・東南アジア諸国にあてた外交文書の案文を収録する。古琉球時代の外交文書案を収録するのは一集である。康熙36年(1697)に天后宮所蔵の一集原本をもとにした再修本2部が作成され、王府と天后宮に収蔵された。琉球処分後、王府本は内務省に移管され、大正12年(1923)の関東大震災で焼失した。天后宮本は沖縄県立図書館に移管され、昭和20年(1945)の沖縄戦で焼失した。焼失前に作成された再修本の影印本・写本が数種ある。

2. 備考

- ①那覇市企画部文化振興課編『那覇市史』資料篇第1巻・歴代宝案第1集抄。
- ②沖縄県立図書館史料編集室編『歴代宝案』校訂本第1冊～第13冊(沖縄県教育委員会、1992～1996年)。
①の底本は東恩納寛淳所蔵影印本・台湾大学本、②は鎌倉芳太郎所蔵影印本の複製本(諸本と校合)である。

『鹿苑日録』 ろくおんにちろく

1. 内容

京都相国寺鹿苑院の歴代院主の公日記。記事は、長享元年(1487)から慶安4年(1651)におよぶ。鹿苑院主は五山禅宗界を統轄する僧録司をつとめ、五山禅僧が室町幕府の外交実務をになっていたこともあって、室町幕府の対朝鮮外交にかかわる記事が多く記され、文禄・慶長の役にかかわる記事もある。『蔭涼軒日録』とともに、室町時代後期を研究する上で重要な史料である。

2. 備考

- ①辻善之助編『鹿苑日録』(大洋社、1934～37)全6冊。
- ②辻善之助編『鹿苑日録』(続群書類従完成会、1961～62)本編6冊・索引1冊、①の再版。

Ⅱ [文禄・慶長の役]

『家忠日記』

1. 内容

徳川氏家臣の松平家忠(1555～1600)の日記。記事は天正5年(1577)から文禄3年(1594)におよぶ。文禄の役勃発前後の簡略な記事をおさめる。

2. 備考

- ①竹内理三編『続史料大成』19・20家忠日記(臨川書店、1967年)。
- ②竹内理三編『増補続史料大成』19家忠日記(臨川書店、1979年)。

「大和田重清日記」

1. 内容

佐竹氏の被官大和田重清(?～1619)の日記。文禄2年(1593)4月18日から12月29日までの記述が残る。内容は、佐竹氏の朝鮮出兵の準備、講和明使の来日等が見られる。また、8月18日から閏9月6日までの日記(名護屋発足～水戸着)は、当該期の交通事情や商業の実態を研究する上で興味深い。

2. 備考

- ①小葉田淳「大和田近江重清日記」(『日本史研究』44～46・48～49・52、1959～1961年)。
- ②高根沢町史編さん委員会編『高根沢町史』第1巻・史料編Ⅰ・原始古代・中世(高根沢町、1995年)。

『加賀藩史料』第1編

1. 内容

同書は、金沢藩の編年史料集。第1～15編、藩末編上・下巻、編外備考の18冊から成る。第1編は、前田利家の生年である天文7年(1538)から慶長10年(1605)までである。文禄元年(1592)正月条から慶長4年(1599)正月条にかけて朝鮮出兵に関する記事が見られる。

2. 備考

侯爵前田家編集部編。石黒文吉刊行。1929年。

『鹿児島県史料 旧記雑録後編』2・3

1. 内容

島津家文書を中心として薩摩藩関係史料を編年集成したもの。原名『旧記雑録』、『薩藩旧記』は別

II. 文禄・慶長の役

称。幕末薩摩藩の史学者で、記録奉行となった伊地知季安は、文政(1818～1830)ごろより長年にわたり島津家をはじめ藩内諸家の文書・記録類の書写収集整理につとめていたが、その子季通も弘化(1844～1848)頃よりこれにさらに多くの書写史料を加え、編年順に集成、歴大な史料集にまとめあげた。朝鮮出兵関係史料を多く収録している。

2. 備考

鹿児島県維新史編さん所編。鹿児島県刊。1982・1983年。

『義演准后日記』

1. 内容

醍醐寺座主義演(1558～1626)の日記。記事は慶長元年(1596)から寛永3年(1626)におよぶ。文禄4年(1595)の明使来日や「慶長の役」にかかわる簡略な記事をおさめる。

2. 備考

副島種経・弥永貞三・鈴木茂男・酒井信彦校訂『史料纂集』古記録48・65・71・145義演准后日記(続群書類従刊行会、1976～2006)全4冊。

『北野社家日記』

1. 内容

北野天満宮社家松梅院の歴代の日記。現存する記事は宝徳元年(1449)から元和5年(1619)におよぶ。天正18年(1590)の朝鮮通信使にかかわる簡略な記事をおさめる。

2. 備考

竹内秀雄校訂『史料纂集』古記録23・24・27・31・33・36・127北野社家日記(続群書類従完成会、1972～2001年)。

「九州御動座記」

1. 内容

天正15年(1587)、秀吉の島津征伐における薩摩までの道程、戦闘経過、戦後工作などを書き記したもの。作者は秀吉の御伽衆大村由己との説もあるが、異論もある。朝鮮関係の記述として、九州平定のあと、対馬の宗氏を通じて朝鮮国王の来朝を促す記述がある。また、朝鮮に象を所望することが記されている。

2. 備考

九州史料刊行会編『九州史料叢書41 近世初頭 九州紀行記集』(九州史料刊行会、1967年)。

『九州戦国誌—戸次軍談—』

1. 内容

本書は、元禄16年(1703)に刊行された『戸次軍談』の覆刻である。著者不明。内容は、戸次(後に立花)鑑連・宗茂の二代にわたって戸次氏を中心に、鑑連の幼年時代の大永年間(1521～1528)から秀吉の朝鮮出兵に至る九州全域にわたる諸豪族の治乱興亡の戦国史である。朝鮮関係記事は、上・中・下の三冊の内、下巻にある。

2. 備考

彦城散人校訂『九州戦国誌—戸次軍談—』下巻(歴史図書社、1978年)。

『久留島文書』

1. 内容

海賊衆来島村上氏(天正13年(1585)に姓を「来島」とし、元和2年(1616)に名字を「久留島」とした)に伝わる文書。豊臣秀吉朱印状等、天正年間から近世初期に至るまでの書状類46通他からなる。文禄の役に際し、来島兄弟(徳井半右衛門尉通年(通之)・村上助兵衛尉通総)に巨済島へ軍勢を入れるようにとの秀吉の朱印状が見られる。

2. 備考

野口喜久雄「[史料紹介]久留島文書」(『歴史学・地理学年報』第8号、九州大学教養部、1984年)。

『黒田家文書』第一巻

1. 内容

旧福岡藩主黒田家に伝来した黒田家資料(福岡市博物館所蔵)のうち、「御感書」十二巻、および関ヶ原合戦までの家文書と中世の「筑前国早良郡背振山東門寺古証文」(結城文書)を収録したものである。積文の他、注解・大意を記す。『影印本』には、全文書の写真を収録する。豊臣秀吉・秀次や徳川家康らが朝鮮在陣中の黒田長政に宛てた文書などを多く収録している。

2. 備考

福岡市博物館編・刊。1999年。

『高麗日記』

1. 内容

肥前鍋島直茂の家臣・田尻鑑種の文禄の役従軍日記。鑑種は天正20年(1592)3月21日、肥前国佐賀を出発し、壱岐・対馬を経て4月27日に釜山に渡海した。5月13日に都(漢城)に入り、咸鏡道まで進んだ。翌年正月、兵を退き、2月20日、慶尚道齊浦に到着したところで日記は終わる。田尻鑑種は、文禄2年(1593)4月29日、朝鮮在陣中に死去している。原本は現存せず、複数の写本が伝来する。

2. 備考

- ①北島万次編『朝鮮日々記・高麗日記』(日記・記録による日本歴史叢書近世編4、そして、1982年)。
 - ②柳川市史編集委員会編『柳川市史史料編Ⅲ 蒲池氏・田尻氏史料』(柳川市、2006年)。
- ①の底本は鍋島家本、②の底本は「田尻家譜」である。

『国史叢書 故郷物語(黒田家)全・大友公御家覚書 全・従道鑒五代記(島津家)全』

1. 内容

「大友公御家覚書」は、九州の豪族大友氏の盛時における種々の由来を記したものである。作者不詳であるが、元和年間(1615～1624)までの事蹟が記されていることから、大友義統の遺臣などが、主家に伝わる由来の一端を覚書として記したものと考えられている。

朝鮮に渡海した大友勢の主だった者の名前や立花宗茂・小西行長、大友義統改易のことが記されている。

2. 備考

黒川眞道編。国史研究会刊行。1916年。

『駒井日記』

1. 内容

安土桃山時代の武将駒井重勝(生没年不詳)の日記。文禄2年(1593)～同4年(1595)にかけての記事が断片的に残る。重勝は豊臣秀次に属して財政関係を担当したため、秀次を中心とした大小の事件を詳細に記し、また公文書の写しを収める。豊臣政権関係の重要史料であり、文禄・慶長の役関係の記事も収録している。

2. 備考

- ①『改定史籍集覧』25、1902年。
- ②駒井重勝著、藤田恒春編校訂『増補駒井日記』(文献出版、1992年)。

『佐賀県近世史料』第1編第1巻、第2巻

1. 内容

[第1巻]

鍋島直茂の年譜の成立年代は定かではないが、享保(1716～1736)段階までは遡るものと推測されている。同年譜は、鍋島直茂の治績を記録することを主眼とし、同時にまた同家が竜造寺家より藩主の地位を移譲された由来と、その継承の正当性を闡明にすることを目的としていた。同年譜には諸写本があるが、本史料集は、延享4年(1747)の『直茂公譜』を底本としている。また、この史料は編纂史料で

はあるが、秀吉の朱印状や直茂の書状の写などを収録している。

『直茂公譜考補』は、天保10年(1839)春、11代藩主鍋島直正が同藩御記録・諸家伝記をもとに『直茂公譜』の異同を考補するよう命じ、同12年5月に完成した。『直茂公譜考補』にも諸写本が存在するが、本史料集は天保15年(弘化元年=1844)に修補を完成した写本を底本としている。関係史料の巻構成は以下の通りである。

- ①直茂公譜第六、朝鮮御陣中 諸勢朝鮮渡海 附、朝鮮王洛去 諸勢朝鮮の洛入
- ②直茂公譜第七、朝鮮御陣中
- ③直茂公譜第八、朝鮮御陣中
- ④直茂公譜第九、朝鮮御陣中
- ⑤直茂公譜考補 第六巻「太閤殿下朝鮮攻之起」ほか3点を収録する。
- ⑥直茂公譜考補 第七巻「咸鏡道御発向」ほか8点を収録する。
- ⑦直茂公譜考補 第八巻「咸興府御越年」ほか11点を収録する。
- ⑧直茂公譜考補 第九巻「直茂公自朝鮮中御帰朝」ほか13点を収録する。

〔第2巻〕

『鍋島勝茂公御年譜』の編纂は、享保年間(1716～1736)に小川俊方(舎人)によって編纂された『御年譜ヲ始、旧記録目録并ニ諸産物』と並行して編纂されたと考えられる。また、藩主の年譜が、その治績を記録・顕彰することを主眼として編纂されることは当然であるが、『直茂公譜』が龍造寺—鍋島の政権交代の正統性を主張するという底流が読みとれるのに対して、『勝茂公譜』は『直茂公譜』との内容の重複をできるだけ避けて編集されている。

『勝茂公譜考補』は、『直茂公譜考補』の完成をうけて、『勝茂公譜』をそれにならって増補、または考補したことにより成立した。

①「勝茂公御年譜一」は、勝茂が天正20年(1592)、13歳の時に名護屋に詰め、父直茂が1万2千の兵を率いて渡海したことから、文禄5年(慶長元年、1596)17歳となり秀吉に高麗渡海を願い出、聞き届けられて出陣し、慶長3年(1598)12月帰朝するまでが記されている。

②「勝茂公譜考補第一巻」は、文禄5年(慶長元年、1596)10月20日勝茂が父直茂に先行して伊万里を出船したところから始まり、慶長3年(1598)12月帰朝、伏見の秀頼に拝謁するまでが記されている。「多久差出」などが引用されている。

2. 備考

佐賀県立図書館編・刊。1993・1994年。

『佐賀県史料集成』古文書編第7巻、第8巻

1. 内容

〔第7巻〕

①「田尻家文書」の田尻氏は、天正17年(1589)、伊万里の西北方山代に千六百余石の地を給され、以来ここに移り住んだ。鍋島直茂が龍造寺氏に代わって国務を見るに及んでその麾下に入った。その

ため、朝鮮に渡った田尻又三郎家和の書状や、家死後家督を相続した春種宛て、直茂・直茂夫人陽泰院が朝鮮の戦況を伝える書状、秀吉朱印状が収録されている。

②「鶴田家文書」の鶴田氏は、もと松浦郡大河野地方に根拠を占めていた松浦党の支流である。嫡家の因幡守勝は、天正年間(1573～1592)早く武雄の後藤氏に従って武雄に移り住み、以来歴代後藤家(のち鍋島家)の老職となった。本史料は鶴田嫡流家の文書である。後藤家信が朝鮮に渡海したことを記す文書などを収録している。

[第8巻]

「龍造寺文書」は、龍造寺隆信の弟、多久長信を祖とする鍋島氏の国老多久家の文書群である。多くは佐賀藩政期のものであるが、文禄5年(1596)のものとして推定される龍造寺六郎次郎(多久安順、長信の子)宛鍋島清茂(勝茂)書状が収録されている。その内容は、朝鮮に渡海した六郎次郎(安順)を労うものである。

2. 備考

佐賀県史編纂委員会編。刊行は、佐賀県立図書館。1963・1964年。

「きたけもんじよ佐竹文書」

1. 内容

秋田藩主佐竹家の文書群(中世常陸時代および秋田移封後の史料をふくむ)。「文禄の役」関係史料をおさめる。

2. 備考

①秋田県立秋田図書館編『佐竹文書』(雄松堂出版、1970年、マイクロフィルム版)。

秋田県立秋田図書館編『マイクロフィルム版佐竹文書解説目録』(1970年)、秋田県立秋田図書館編『秋田県立秋田図書館蔵佐竹文庫目録』(1955年)を参照。

『さんみやくいんき三藐院記』

1. 内容

戦国期～江戸初期の公卿近衛信尹(1565～1606、極官関白)の日記。記事は文禄元年(1592)から慶長11年(1606)におよぶ。文禄元年に信尹は、左大臣を辞して朝鮮渡海を希望したため、後陽成天皇の勘気をこうむって薩摩に配流された。それゆえ、島津氏家臣の朝鮮出陣にかかわる記事などをおさめ、別記の「豊臣秀次任内大臣次第」には、豊臣秀吉の大陸征服欲に言及した部分がある。

2. 備考

近衛通隆・名和修・橋本政宣校訂『史料纂集』45三藐院記(続群書類従完成会、1975年)。

『舜旧記』

1. 内容

曹洞禅僧梵舜(?～1653)の日記。記事は天正11年(1583)から寛永9年(1632)におよぶ。「文禄の役」の勃発や文禄4年(1595)の明使来日にかかわる簡略な記事をおさめる。

2. 備考

鎌田純一校訂『史料纂集』12・32・51・59・64・98・105・120舜旧記(続群書類従完成会、1970～1999年)。

『相国寺蔵西笑和尚文案』

1. 内容

豊臣・徳川政権の外交僧西笑承兌(1548～1607)の自筆文案(通称「西笑和尚文案」、1597～1607)、有節瑞保・鶴峰宗松の自筆日記「文禄中日記」、および相国寺本坊所蔵文書のうち承兌生存中のものを収録する。承兌が外交僧であったことから、「文禄・慶長の役」関係史料が多い。

2. 備考

伊藤真昭・上田純一・原田正俊・秋宗康子編。思文閣出版刊行。2007年。

『新訂 黒田家譜』第1巻

1. 内容

『黒田家譜』は、寛文11年(1671)10月5日、福岡藩3代藩主黒田光之が、儒臣貝原益軒(名は久兵衛、諱は篤信、号は益軒又は損軒)に命じて編集せしめた福岡藩黒田家の公式記録である。そのため、文禄・慶長の役についても黒田長政を始めとする黒田軍の勇戦ぶりを中心に記している。

①「黒田家譜卷之六 朝鮮陣 上」は、天正19年(1591)、秀吉が唐入を宣言し、朝鮮渡海を命じるところから、文禄2年(1593)、大友義統が明の大軍到来を聞いて退却し、改易されるところで終わる。

②「黒田家譜卷之六 朝鮮陣 中」は、文禄2年1月16日、明の大將李如松が十万の兵を率いて到来し起こった碧蹄館の戦いから、文禄3年(1594)の和議による日本の諸将帰国、慶長元年(1596)8月の明よりの使者到来、そのもたらした璽書に秀吉が怒り、再度の渡海を命じ諸将が渡海の用意をすることで終わる。

③「黒田家譜卷之六 朝鮮陣 下・豊臣太閤御薨逝」は、慶長2年(1597)2月の太閤秀吉から黒田長政を始めとする諸将に命じた軍令から始まり、慶長3年(1598)8月18日の太閤薨去、日本の諸将帰朝、明軍帰国で終わる。

2. 備考

川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『新訂 黒田家譜』第1巻(文献出版、1983年)。

『統群書類従』第20輯下 合戦部

1. 内容

『統群書類従』は、江戸時代後期に塙保己一が刊行した『群書類従』のあとに続いて寛政7年(1795)～同8年(1796)ごろから企画され、保己一死後も編纂作業が進められ明治16年(1883)に約850巻が宮内省に納められた。

①巻第五百九十上「朝鮮記乾」の『朝鮮記』は、豊後臼杵城主太田一吉の家臣大河内茂左衛門尉秀元の従軍記録である。奥書には、自らが戦場に行き、朋友の話を偽りなく記した、とある。乾巻は、慶長2年(1597)3月18日、小早川秀秋が総大将となり朝鮮再派兵がなされたところから始まり、同年12月22日の明軍の蔚山攻撃で終わる。

②巻第五百九十下「朝鮮記坤」は、同年12月23日の蔚山での攻防から始まり、慶長3年(1598)3月13日、日本側の城塞普請がなり、そのため秀詮(秀秋)とともに諸将が帰朝し、同年4月4日大坂に着き、同月5日伏見の秀吉のもとに伺候した記事で終わる。

③巻第五百九十一「島津家高麗軍秘録」は、島津家家臣の淵邊晝右衛門元眞が「高麗入」のことに記した覚書である。成立は万治3年(1660)5月。淵邊は、島津義弘に付き従って朝鮮に渡ったときは十五歳であった。慶長2年島津義弘の朝鮮渡海から始まり、慶長4年(1599)2月の義弘帰国までを記している。

④巻第五百九十一「吉野甚五左衛門覚書」は、肥前平戸城主松浦法印(鎮信)麾下の吉野甚五左衛門の覚書である。奥書に「船中にて書き申し候間、弥見へまじく候、萬幸々々、釜山浦ニテ、文禄二年七月四日」とある。天正20年(1592)3月12日壱岐島に朝鮮渡海の兵船が揃い、対馬を経て釜山浦に着船。同年4月13日釜山城攻撃を開始したところから記されている。文禄2年(1593)4月に講和のしるしとして人質が送られてきたところで終わる。松浦法印・小西行長の動向が詳細に記述されている。

⑤「巻第五百九十一「本山豊前守安政父子戦功覚書」は、加藤清正に仕え、朝鮮において加藤清正勢の先陣を務めた本山豊前守安政(初名桑原平八郎、秀吉の上意により加藤清兵衛と改名)とその子本山河内守(大助、父の死後豊前守)の戦功について尋ねられた本山豊前の家臣桑原弥左衛門が記した覚書である。本山安政は、のちに加藤清正のもとを離れ蒲生秀行に仕え、二本松城代となった。進上した日付は6月28日とだけあり、本書の成立年次については不明である。文禄・慶長の役における加藤勢と本山父子の動向を中心に記されている。

⑥巻第五百九十三上「脇坂記卷上」の『脇坂記』は、脇坂安治の行動を中心に記述した戦記。『脇坂家記』、『脇坂家伝記』ともいう。奥書には、「寛永十九年(1642)七月朔日」とある。著者は不明であるが、脇坂家で作成したことは確実である。脇坂家の系譜であり、安治の経験した戦闘を詳細に記述している。目的は、安治の戦功を顕彰することにあるが、記述はある程度信頼がおけ、豊臣秀吉朱印状などが原文のまま収録されている。文禄・慶長の役に関しては、文禄元年(1592)からの記述があり、安治が九鬼大隅守(嘉隆)、加藤左馬助(嘉明)とともに船手の大将として出陣した箇所から記されている。

⑦巻第五百九十三下「脇坂記卷下」は、文禄2年正月から始まり、安治が慶長3年6月22日付、三千石加増の感状(豊臣秀吉朱印状)を与えられたところで終わる。

⑧巻第五百九十七「関岡家始末」の『関岡家始末』は、室町時代中期伊賀国南部に勢力を張っていた関岡氏の由緒と、その軍功について軍記物語風に記述したもの。末尾に元和8年(1622)9月7日の識語がり、関岡氏の末裔義実の子浮遊が、北畠氏の家臣鳥尾(鳥尾屋)石見守の書き留めておいた家譜を材料にして述作したことが知られる。文禄・慶長の役については、義実が加藤清正勢に属して戦功をたて、秀吉から脇差と山城国枇杷庄・伊勢国荒木の地を与えられたことが記されている。

2. 備考

続群書類従完成会刊行。1923年。

『続群書類従』第23輯 上 合戦部

1. 内容

①巻第六百四十六下「長曾我部元親記下」は、土佐の戦国大名長宗我部元親の伝記。『元親記』と略称される。元親の家臣高島孫右衛門正重(重漸)の著。上・中・下の三巻からなる。寛永8年(1631)5月19日、元親の三十三回忌にあたって霊前に捧げられた著作。文禄・慶長の役については、下巻の「高麗陣之事」、「高麗赤國陣之事」に記述がある。

②巻第六百四十七「高橋記」は、「高橋紹運記」、「紹運記」、「九州兵乱記」などの呼称もある。著者は、柳川立花家の家臣伊藤源右衛門入道一簑。記述は比較的正確と思われる。また、少数ながら古文書を収めている。成立は、慶安4年(1651)8月。文禄・慶長の役に関しては「紹運公御縁邊之事」に紹運の実子で戸次家に入った統虎(立花宗茂)の行動について若干の記述がある。

③巻第六百五十「黒田長政記」は、黒田長政13歳の初陣から、関ヶ原合戦において東軍に与し勝利したことまでの半生を記したものである。作者・成立年次は不明。文禄・慶長の役については、その記述の半分を占める。

④巻第六百五十二「清正記巻一・二・三」は、肥前熊本城主加藤清正に関する伝記。編著者は古橋左衛門又玄。全3巻から成る。成立期は、江戸時代の初期正保・慶安年間(1644～1652)と推定される。文禄・慶長の役中の行動は、下川兵太夫・木村又蔵が書き置いたものを基にして記されている。

⑤巻第六百五十三「加藤家伝清正公行状」は、奇・正2巻からなり、作者・成立時期は不明。清正宛の秀吉朱印状などを多く収録している。文禄・慶長の役に関する記述は、奇巻の大部分を占める。正巻には、朝鮮に出陣した際の陣立や軍律、旗指物の図が記されている。

2. 備考

続群書類従完成会刊行。1924年。

『太閤記』

1. 内容

豊臣秀吉の事蹟を書きとめた記録。小瀬甫庵著、寛永2年(1625)自序、22巻。巻13～16は、文禄元年(1592)に始まる朝鮮出兵とその顛末を叙す。内容は、大村由己の『天正記』などを素材に、文書・記

録を織りまぜた構成となっているが、第13の朝鮮陣に関する文書などは明白な偽文書である。特に江戸幕府の目を意識して無理な構成をとっていることが特徴的である。史実を改変し、とくに慶長の役の戦記については省略が多く、明との交渉に意を用いる秀吉を描く。朝鮮からの撤退については記していない。

①巻十三は、「高麗陣起之事」から「三奉行都表に引き還す事」まで、②巻十四は、「將軍(秀吉)名護屋に於いて癸巳御越年之事」から「うるさんの事」まで、③巻十五は、「賀藤(加藤)主計頭清正都表に至りて勢を入る事」から「朝鮮陣七年之事」までである。④巻十六では、「遊撃將軍日本再渡之事」に明使節が大坂に来たことが記されている。

2. 備考

小瀬甫庵著、檜谷昭彦・江本裕校注『太閤記』(岩波書店、1996年)。

『大かうさまくんきのうち』

1. 内容

安土桃山時代の武士である太田牛一(1527～?)が著した軍記物語。内容は、後陽成天皇の徳をたたえた記事や秀吉の出世に関する内容から、関白秀次の切腹、三好実休・松永久秀・斎藤道三父子らの没落、朝鮮出兵まで多岐に渡る。最後は、秀吉が慶長3年(1598)に醍醐で花見をした記事で終わる。史実に近い記述であるとされている。

2. 備考

慶長年間(1596～1614)に成立したとされる自筆本(慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編)が汲古書院より影印版として刊行されている。

また、「天正事録」(『続群書類従』雑部)および「太田牛一筆記」(東京大学附属図書館蔵)は、本史料の抄写本をさらに加筆したものと思われ、部分的ではあるが、内容の一致を見る。

『大閣秀吉朝鮮征討記本』

1. 内容

近世対馬藩の外交僧規伯玄方が藩主宗義真に献上した巻物5本のうちの1本。朝鮮国王(宣祖)書契・日本国王(豊臣秀吉)書契や文禄・慶長の役関係史料を収める。韓国国史編纂委員会所蔵。

2. 備考

田代和生・李薫監修『朝鮮通信使記録』別冊下(対馬宗家文書マイクロフィルム版第I期、ゆまに書房、2000年)。

『大日本古文書 家わけ第二 浅野家文書』

1. 内容

内容的には、他の大名家文書に比べ秀次朱印状が多く、また「浅野幸長高麗陣蔚山表覚書」などの慶長2年(1597)12月から同3年(1598)正月にかけての蔚山城合戦に関する詳細な史料が収録されている。

本書には、文禄2年(1593)8月6日付浅野長政・増田長盛・石田三成・大谷吉隆(吉継)宛豊臣秀吉朱印状写を始めとする文禄2年～慶長2年の秀吉朱印状13通、文禄元年(1592)12月7日付浅野幸長宛豊臣秀次朱印状を始めとする秀次朱印状7通、その他浅野長政・幸長書状など15通、計35通を収録する。

2. 備考

東京大学史料編纂所編・刊。1906年(復刻版1968年)。

『大日本古文書 家わけ第三 伊達家文書之二』

1. 内容

伊達政宗が生母保春院や留守居家臣に宛てた朝鮮での戦況を伝えるものなど、伊達家内で遣り取りされた文書が多くを占める。秀吉朱印状はない。

天正19年(1591)から慶長3年(1598)の伊達政宗書状10点、(文禄2年=1593)卯月28日付伊達政宗宛加藤清正書状ほか政宗宛書状5点、(文禄2年)5月18日付伊良子信濃宛最上義光書状写、(文禄2年)5月26日付伊達政宗宛豊臣秀次朱印状の計17点がある。

2. 備考

東京大学史料編纂所編・刊。1908～1914年(復刻版1969年)。

『大日本古文書 家わけ第五 相良家文書之二』

1. 内容

収録文書には秀吉朱印状が少なく、豊臣家奉行人や九州諸大名とその家臣から相良頼房(長毎)に宛てられたものが多い。天正19年(1591)から慶長2年(1597)にかけて、石田三成や小西行長を始めとする多くの人物が相良頼房(長毎)に宛てた書状計83点を収める。また、(文禄5年(1596)か)3月6日付相良頼蔵(左馬助)宛小西末郷書状や慶長2年2月21日付相良頼房宛豊臣秀吉朱印状ほか6点の秀吉朱印状を含む計90点を収める。

2. 備考

東京大学史料編纂所編・刊。1917～1918年(復刻版1970年)。

『大日本古文書 家わけ第八 毛利家文書之三』

1. 内容

秀吉発給文書が多い。他家文書と異なり、山陽道に領国を有す毛利輝元に渡海通送態勢を命ずるものが含まれるのが特徴である。

天正19年(1591)から慶長2年(1597)にかけての毛利輝元宛秀吉朱印状44点、(天正20年=1592)正月5日付豊臣秀吉捷書、豊臣秀吉禁制7点、天正20年3月13日付高麗渡海陣立書などを収めるとともに、天正20年から文禄2年にかけての小早川隆景・毛利輝元宛豊臣秀次朱印状9点を含む計73点の文書を収録する。

2. 備考

東京大学史料編纂所編・刊。1920～1924年(復刻版1970年)。

『大日本古文書 家わけ第十一 小早川家文書之一・二』

1. 内容

小早川隆景は文禄の役に参加し、文禄4年(1595)に秀秋に家督を譲り引退したため、慶長の役に関する史料はほとんどなく、文禄の役関係史料が多くを占める。

第1巻には、(天正20年=1592)正月24日付小早川隆景宛豊臣秀吉朱印状を始めとする秀吉朱印状46点、足利義昭書状2点、豊臣秀次朱印状6点、(文禄2年=1593)5月19日付小早川隆景宛長束正家書状を始めとする奉行人などの書状13点、計65点を収録する。

第2巻には、秀吉朱印状1点、豊臣氏奉行人連署奉書1点など、計4点を収録する。

2. 備考

東京大学史料編纂所編・刊。1927年(復刻版1971年)。

『大日本古文書 家わけ第十二 上杉家文書之二』

1. 内容

(天正20年=1592)12月7日付上杉景勝宛豊臣秀次朱印状など文禄の役に関する文書4点とともに、慶長の役に関する文書として、(慶長3年=1598)9月29日付上杉景勝宛増田長盛書状を収める。

2. 備考

東京大学史料編纂所編・刊。1931～1963年(復刻版1971～1973年)。

『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書卷之一・二・三』

1. 内容

第1巻は、天正19年(1591)から文禄2年(1593)までの島津義久宛秀吉朱印状や、天正20年(1592)から慶長3年(1598)までの島津義弘宛吉朱印状など、計50点の文書を収録する。

第2巻は、近衛前久書状、秀吉朱印状、豊臣氏奉行人などの書状・連署状など、計49点の文書収める。

第3巻は、島津家以外に宛てた秀吉朱印状案文、(文禄3年=1594カ)9月17日付小西行長宛鍋島直茂書状など、計17点の文書収める。

2. 備考

東京大学史料編纂所編・刊。1942～1966年。

『高根沢町史』史料編1

1. 内容

栃木県高根沢町の町史。本書は、原始古代・中世の史料を収録するが、中に「大和田重清日記」が収録されている。大和田重清は佐竹氏の家臣であり、同日記には文禄の役に従軍した際の記録もふくまれている。

2. 備考

高根沢町史編さん委員会編。高根沢町刊行。1995年。

『高山公実録(藤堂高虎伝)』上巻

1. 内容

『高山公実録』は、高山院寒松道堅、すなわち藤堂高虎の事蹟を編纂収録した実録。成立は、寛文4年(1664)、大神惟直の編纂にかかるという説がある。

巻四は、文禄元年(1592)、藤堂高虎が、豊臣秀保の軍代として手勢二千を率い、九鬼嘉隆・脇坂安治・加藤茂勝(嘉明)の諸将とともに船手の大将となった記事から始まり、慶長2年(1597)7月7日、高虎は再度朝鮮に渡海し、船手の総督となってその軍功を賞され、7月10日付高虎宛秀吉朱印状を賜った記事で終わる。

巻五は、慶長2年7月15日、朝鮮の番船数千艘が釜山と唐島(巨濟島)の間を往来し、日本軍の通路を押さえたため、藤堂高虎らは、夜船を出撃させ朝鮮の船を焼き払ったこと(巨濟島海戦)から、同年8月15日夜襲によって明軍の守る南原城を攻略し、秀吉から感状を与えられた記事で終わる。

巻六は、忠清道(青国)への侵攻から始まり、慶長3年(1598)5月高虎が朝鮮から帰朝、同年7月22日に伏見で秀吉に拝謁し、1万石を加増され都合8万石となった記事で終わる。

巻七は、慶長3年8月18日、秀吉が伏見で死去し、朝鮮在陣諸将は撤退することになったが、10月、明の大軍が迫ったため、高虎は博多に赴いたこと、島津義弘が明軍を破り、諸将が帰朝したことが記されている。

2. 備考

清文堂史料叢書 第98。上野市古文献刊行会編。清文堂出版刊。1998年。

『多聞院日記』

1. 内容

奈良興福寺僧の多聞院英俊(1518～1596)などの日記。一部他人の記述も含まれる。現存する記事は文明10年(1478)から元和4年(1618)におよぶ。原本は現存しないが、興福寺所蔵本をはじめ写本が数種ある。中世より近世にわたる社会変革期の史料として珍重される。秀吉の大陸征服計画、朝鮮通信使の来日、「文禄の役」にかかわる記事がおさめられるとともに、伝聞ではあるが、朝鮮陣の動静が散見される。

2. 備考

- ①辻善之助編『多聞院日記』(三教書院、1935～1939年)全5冊。
- ②辻善之助編『多聞院日記』(角川書店、1967年)本編5冊・別巻1冊。
- ③竹内理三編『増補続史料大成』第38～42冊・多聞院日記(臨川書店、1978年)全5冊。

「朝鮮陣留記」

1. 内容

吉見元頼に従って朝鮮に渡った下瀬頼直の記録。慶尚道における毛利勢の活動が記されている。

2. 備考

中野等『朝鮮出兵期における諸大名の動向およびその領国に関する基礎的研究』(科学研究費補助金研究成果報告書、2004年)に翻刻されている。また、ほぼ同内容のものが「下瀬頼直朝鮮渡海日記」として、防長史談会編『防長史学』特輯号(其の二)(1934年)に翻刻されている。

「朝鮮日々記」

1. 内容

慶長の役に、豊後国臼杵の大名太田一吉の医僧として従った、臼杵安養寺の僧慶念の従軍日記。慶長2年(1597)24日の出船から、翌3年2月2日の帰朝に至る。朝鮮各地での移動と戦いの様を記すが、とくに蔚山城の築城や籠城の記述は詳細である。

2. 備考

- ①北島万次編『朝鮮日々記・高麗日記』(日記・記録による日本歴史叢書近世編4、そしえて刊、1982年)。
- ②朝鮮日々記研究会編『朝鮮日々記を読む－真宗僧が見た秀吉の朝鮮侵略－』(法蔵館、2000年)。

『言経卿記』

1. 内容

公家山科言経の日記。記事は天正4年(1576)から慶長6年(1601)におよぶ。天正18年(1590)の朝鮮通信使来日や文禄の役にかかわる簡略な記事をおさめる。

2. 備考

①東京大学史料編纂所編『大日本古記録』言経卿記(岩波書店、1959～1991年)全11冊。

『徳川家康文書の研究』中巻

1. 内容

江戸幕府の創設者徳川家康が発給した文書を渉猟し、編年に並べ、文書1点ごとに懇切な解説を付した史料集である。上・中・下之一・下之二のほか拾遺集を含め全5冊。朝鮮出兵関係史料は、中巻の文禄元年(1592)から慶長4年(1599)に収録されている。具体的には、編年順に中村一氏宛書状1点、松井康之宛書状1点など計21点を収録する。家康単独で発給しているものは、家康が親密にしている諸大名とその家臣に宛てたもので、大老連署状は秀吉死後の戦後処理に関するものである。

2. 備考

中村孝也著。日本学術振興会刊。1959年。

『中川家文書』

1. 内容

豊後国岡城主中川家の家文書。本史料集は、神戸大学文学部日本史研究室所蔵の中川家文書全点を、年代順に収めたものである。(天正19年=1591)3月13日付木下勝俊・木下俊房・中川秀政宛豊臣秀吉朱印状などの秀吉朱印状16点を始めとする計21点の文書を収録する。

2. 備考

神戸大学文学部日本史研究室編。臨川書店刊。1987年。

『南部家文書』

1. 内容

南部氏は、鎌倉時代以来の武士で、天正18年(1590)、信直のとき、秀吉から陸奥国南部内7郡の領地を安堵され、近世大名としての地位を固めた。その家文書である。

南部信直が、秀吉の朝鮮出兵が始まることを、信直の娘千代子に伝える南部信直書状など4点を収録するが、秀吉の朱印状はない。

2. 備考

鷺尾順敬編。吉野朝史蹟調査会刊。1939年。

『にほんぎきよくぜんしゅう日本戯曲全集』がいにかん第二巻 なみきしょうぞうしゅう並木正三集

1. 内容

近松徳三の作「けいせい廓源氏」は、享和2年(1802)正月、大坂中の芝居初演。眞柴久吉(羽柴秀吉)が朝鮮国征伐を思い立ち、加藤・小西を始めとする諸将に大軍を授け、攻め討たせるという場面から始まる。

2. 備考

渥美清太郎編。春陽堂刊。1929年。

『にほんせんし日本戦史』ちょうせんのかき朝鮮役』

1. 内容

『日本戦史』は、参謀本部編の戦史研究書。戦国時代における主要な合戦をとりあげ、明治末年から大正年間(1912～26)にかけて13巻が刊行された。戦役前の形勢、作戦、戦後の動静および結果といった順序で記され、補伝として出典の一部を原文史料として掲げている。

①『日本戦史朝鮮役』は、第1編「起因及戦役前ノ形勢」、第2編「前役」、第3編「講和」、第4編「後役」、第5編「結果」という構成で、②『日本戦史朝鮮役 附記』は、第1「兵制、兵器及築城」、第2「給養、兵站及衛生」、第3「運輸、通信及船舶」、第4「軍紀及風紀」、第5「民政及賑恤」という構成である。さらに③『日本戦史朝鮮役 文書』、④『朝鮮役補伝』が付される。

2. 備考

参謀本部編。村田書店刊行。1978年(初版は1924年)。

『ひゅうがき日向記』

1. 内容

伊東氏の初祖から寛永13年(1636)に至る間の伊東氏歴代実録。巻一の「工藤伊東開基之事」から巻十三の「祐慶主逝去祐久主家督ノ事」に至るまで百八十四項について記述している。序および後叙によれば、永禄初年、落合兼朝の集成したものをもとに天正18年(1590)落合伊賀入道が再補し、さらに海老原為誠・田丸信成らが後補修飾を加えたという。

朝鮮出兵に関しては、巻十一の「高麗御渡海並働事」、「高麗陣中領地ノ高ヲ挙ル事 附河崎駿河守御目見ノ事」に記されている。秀吉朱印状を多く収録し、それをもとに記述がなされている。

2. 備考

①日向郷土史料集刊行会編『日向郷土史料集 第2巻』(日向郷土史料集刊行会、1962年)。

②宮崎県編『宮崎県史叢書3 日向記』(宮崎県、1999年)。

『フロイス 日本史』2 豊臣秀吉篇Ⅱ

1. 内容

フランシスコ＝サビエルの来日から文禄元年(1592)ごろまでの40年余の日本イエズス会布教史である。16世紀の後半に、約30年間日本に滞在し、織田信長、豊臣秀吉をはじめとする為政者から庶民に至るまで、各階層の人々と交流をもったポルトガル人宣教師ルイス・フロイスによる第一級の史料である。

①第34章は、関白秀吉が明を征服しようと志した次第、ならびに甥(豊臣秀次)を後継者とし、自らは関白の頭職を引退し、その称号を彼に与えたこと。

②第35章は、明の征服事業における日本諸侯の苦難、ならびに秀吉がその実行を容易にするために、まず明と隣接する朝鮮を武力で征服しようと決意した次第。

③第36章は、朝鮮国の描写、およびアゴスチノ(小西行長)がその艦隊を率いて先発した次第。

④第37章は、朝鮮に向けて進発したアゴスチノ(行長)が、幾つかの城を攻撃し、大いに苦勞して、軍勢をもってそれらを屈服せしめたこと、ならびにそこで彼が獲得した名誉について。

⑤第38章は、アゴスチノ(行長)が朝鮮の「都」に入るに先立って生じたこと。

⑥第39章は、老関白秀吉が朝鮮に渡ることが回避された次第、ならびに日本側の戦闘力が衰微し、悪化して行った次第。

⑦第40章は、明軍と遭遇したアゴスチノ(行長)が野戦を交え、勝利したことについて。

⑧第41章は、明軍が日本軍と交えた戦闘、ならびに種々の出来事について。

⑨第42章は、行長の家臣達がアゴスチノ(行長)に平安(平壤)を放棄するよう説得したこと、およびそれに関する他の出来事について。

⑩第43章は、日本軍が朝鮮の「都」を放棄したこと、ならびにアゴスチノ(行長)が和平協定を議するために二名の明使を伴って名護屋に赴いた次第。

⑪第44章は、老関白秀吉が明の使節に与えた回答、およびその後アゴスチノ(行長)が朝鮮軍から得た幸運な勝利、ならびにその他の出来事について。

⑫第45章は、文禄2年(1593)、秀吉が命じた幾つかのことについて。

2. 備考

松田毅一・川崎桃太訳。中央公論社刊。1977年。後に中公文庫に収録された。

『豊太閤征韓秘録』第1集

1. 内容

①「朝鮮征伐記」第一～第四は、文禄の役の記録で、藤原惺窩の門弟堀正意(杏庵)が万治2年(1659)にまとめたもの。天正18年(1590)、豊臣秀吉が朝鮮に服属強要をしたこと、文禄の役における漢城(ソウル)陥落、小西行長の平壤占領、明提督李如松の平壤攻撃と小西行長の敗退、加藤清正の咸鏡道侵入、日明講和交渉などの記述がある。

②「吉野日記」は、別名「高麗もろこしの草子」で、松浦鎮信の家臣吉野甚五左衛門の日記である。

文禄2年(1593)の成立。

③「南大門合戦記」は、作者は旧明智光秀家臣の天野源左衛門。立花家に仕えて朝鮮に渡り、のちに寺沢志摩守広高に仕え八千石を領した。立花宗虎(宗茂)の旗下に属していた天野が、文禄2年正月の碧蹄館の戦いを中心に記したものである。

④「征西日記」は、外交僧天荊が文禄の役の際、小西行長・宗義智の軍に従軍した時の日記。記事は、文禄元年(1592)3月12日から同年8月10日に及ぶ。天荊は、博多聖福寺の僧景轍玄蘇らとともに朝鮮外交僧としての経験を持ち、その文筆の技術をもって従軍し、朝鮮民衆を生業に就かせるための榜文を書いたり、朝鮮軍と軍事上の駆引きをする際の交渉文を書いたりした。

2. 備考

松本愛重纂輯。成歎社刊行。1984年。

『綿考輯録』第1巻藤孝公・第2巻忠興公(上)

1. 内容

『綿考輯録』は、『細川家記』とも称する肥後熊本藩主細川氏の家史。全73巻。小野武次郎景湛編纂、天明2年(1782)中清書成る。

第2巻は、文禄元年(1592)春、秀吉の「朝鮮征伐」の軍令から始まり、主として文禄の役の事蹟が記されている。忠興宛秀吉朱印状の写、細川家家老松井佐渡守宛家康書状写などの文書を収録している。また、「宮本家記」「家忠日記」「松井家記」「征伐記」「清正記」「沼田家記」などとの校合がなされている。

2. 備考

石田晴男・今谷明・土田将雄編。汲古書院刊。1988年。

『八代の歴史と文化17 小西行長—Don Agostinho—』

1. 内容

小西行長が発給した文書のうち、現在所在および内容が確認できる資料を年代順に収録している。東京大学史料編纂所所蔵「島津家文書」、慶応義塾大学図書館所蔵「相良家文書」、長崎県立対馬歴史民俗資料館所蔵史料、『大日本古文書』所収「吉川家文書」・「相良家文書」・「浅野家文書」他から関係文書を収録している。全90点。一部画像も掲載している。宗氏と行長の対朝鮮交渉や朝鮮侵略における行長の活動を示す史料群である。

2. 備考

八代市立博物館未来の森ミュージアム編・刊。2007年。

『れきだいにあん歴代古案』

1. 内容

越後上杉氏およびその家臣の家の古文書を筆録したもの。米沢市立図書館所蔵10冊本。越後の戦国・安土桃山時代を研究する上での重要史料である。上杉景勝家臣泉沢久秀が伊勢御使蔵田左京亮に充てた書状の中に、景勝の熊川城普請に関する記事が見られる。

2. 備考

『史料纂集』古文書編 25、26、29、33、34。羽下徳彦・阿部洋輔・金子達校訂。続群書類従完成会刊。

Ⅲ[近世]

『あかしはんちようせんこくしんしせつばんきやく明石藩朝鮮国信使折伴記録あかししししりやう(明石市史資料 第二集)』

1. 内容

明石藩(越前家松平氏)が正徳・享保・寛延・明和年度の朝鮮通信使を迎えた際の記録および関連資料が上下巻に分割して翻刻されている。

上巻には、正徳元年(1711)の記録として「朝鮮人御馳走日記」(五冊)「朝鮮人来聘ニ付町中御觸之写」「淀川船中京都大仏御菓子被下覚」「朝鮮信使行列」が、享保4年(1719)の記録として「朝鮮人明石表通船御用日記」(三冊)「朝鮮人明石表通船之節引船留帳」、寛延元年(1748)の記録として「朝鮮人明石表通船御用日記」(四冊)が収録されている。「朝鮮信使行列」は通信使の隊列を文字によって図示したもので、その他はいずれも通信使の通行および接待にあたっての心得書きである。

下巻には、明和元年(1764)の記録として「朝鮮人御用帳面」、天和2年(1682)年の記録として「朝鮮人来朝記」「朝鮮人来朝ニ付公義御書出覚」「朝鮮人来聘付大磯御馳走覚」「朝鮮人来朝之控」、付編として「江漢筆談」が収録されている。内容は同じく通信使の通行および接待に関する心得書きであるが、通信使による書状や漢詩なども収録されている。「江漢筆談」は正徳元年の通信使来聘に際し、新井白石が通信使と東本願寺にて対面した時の記録である。

2. 備考

明石市教育委員会刊。1981年。

『あめのもりほうしゅうかんけいしりようちようさほうこくしょ雨森芳洲関係資料調査報告書』

1. 内容

①図版は、雨森芳洲の書簡や宗家文庫史料などの写真版である。

②宗家文庫史料(翻刻)は、雨森芳洲、雨森鵬海、雨森涓庵、松浦桂川、雨森蘭洲、雨森何有、雨森桂山、雨森龍山(二橋)、雨森舳洲、松浦霞沼、松浦龍岡、陶山訥庵といった朝鮮との交渉、朝鮮使節来聘に関わった人物についてそれぞれ宗家文庫の記録類・日記類から関係記事を摘録している。

2. 備考

滋賀県教育委員会編。高月町立観音の里歴史民俗資料館刊。1994年。

『あらいちやうし新居町史』史料編3

1. 内容

朝鮮通信使が通行した東海道の今切の渡・新居宿の同使節通行に関する史料である①～⑦を収録する。

①「享保四年朝鮮人来往新居宿寄船村々帳」、②「延享四年来辰朝鮮人来朝時の賄代官、官人宿修覆」、③「延享四年来辰朝鮮人来朝の村継廻状」、④「延享五年来朝ニ付差上書付並御触書覚」、⑤「延享五年朝鮮人来朝時の御用人馬、御手代様方兩年分扣」、⑥「寛延元年延享中朝鮮人来朝時の船路築出しの件」、⑦「宝暦十二年 来未年朝鮮人来朝ニ付諸事控帳」。

2. 備考

新居町教育委員会編。静岡県浜名郡新居町刊。1972年。

『新井白石全集』

1. 内容

新井白石の全集。全7巻。第一・二巻には「藩翰譜」および「藩翰譜続編」が、第三巻には随筆「折りたく柴の記」や歴史書「古史通」「読史余論」、地誌「南島志」「蝦夷志」などが収録されている。外交関係の略史である「五事略」には、朝鮮・中国をはじめとする異国との往復書式についての記述がある。第五巻には「白石先生遺文」「白石先生手簡」など書簡・遺文集や「白石詩草」のような詩文集が収録されている。

第四巻には朝鮮関係の著作がまとめて収録されているので、以下にその内容を示す。

「東雅」「東音譜」「同文通考」は日本・中国の言語、発音、言葉の由来などについて解説した書である。「朝鮮聘礼事」「朝鮮信使進見儀注」「朝鮮信使賜饗儀注」「朝鮮信使辞見儀注」は正徳度の通信使を迎えるに当たったの取り扱い記録である。信使の座席を図示したものなどを含む。「奉命教諭朝鮮使客」は正徳度の信使に申し渡した事項をまとめたものである。「朝鮮国信書之式の事」は外交文書と「国王」、「大君」号に関する白石の考えを述べたものである。

「朝鮮信使議」「朝鮮聘使後議」に収録されている新井白石書状は、日朝の外交儀礼や対馬での易地聘礼策などに関して述べられている。「朝聘応接記及抄訳」は申叔舟『海東諸国紀』の中から、日本からの使者が朝鮮で応接される記事のみを抄訳し、考察を付したものである。

「朝鮮冠服の事」は通信使の公服、常服、礼服など、儀礼に合わせた服装を紹介。「国書復号記事」には対馬藩主の書状や朝鮮国書などが編年順に収録されている。「以酌庵事議草」は禅僧が外交文書の起草を司ることについて、その沿革を説きながら考察したものである。「坐間筆語」は通信使のために行なわれた楽奏に関する記録。「江関筆談」は白石が、通信使の宿泊していた本願寺を訪問し行なった問答の記録で、筆記は趙泰億による。「白雉帖」は将軍から通信使に贈られた屏風の画賛である。

「西洋紀聞」「采覧異言」は白石がローマ人宣教師シドッチを尋問した際の記録をもとにして執筆された地理書である。

2. 備考

今泉定介編集・校訂。吉川半七刊。1905～1907年。

『異本隣語大方・交隣須知』

1. 内容

朝鮮語と日本語を対訳した文例集「隣語大方」と単語集「交隣須知」の異本数種を影印出版したものの。

①京都大学蔵苗代川写本「隣語大方」は、日本において対馬の訳官たちが朝鮮語学習に用いた書の系統を引く江戸時代の写本で、薩摩の苗代川に伝えられたものである(現在は京都大学所蔵)。②京都大学蔵苗代川写本「講話」も同じく薩摩の苗代川に伝えられた写本で、江戸時代末期に作成された日本人のための朝鮮語学習書である。③明治十五年外務省蔵板「隣語大方」は、明治15年(1882)に外務省によって活字翻刻された「隣語大方」である。④明治十六年外務省蔵板「交隣須知」・⑤明治十六年版寶迫繁勝刪正「交隣須知」は明治16年(1883)、⑥明治三十七年版前間恭作校訂「交隣須知」は明治37年(1904)に版行された「交隣須知」である。

2. 備考

京都大学国語学国文学研究室編。京都大学国文学会刊。1967年。

『岩国藩(吉川家)正徳度朝鮮通信使帰帆記』

1. 内容

正徳度の朝鮮通信使(復路)の応接にかんする岩国藩吉川家の記録である。通信使が江戸を出発したという情報が伝えられると、岩国藩の方で応接の準備がはじめられる。この応接の準備にあたっての伺い書や、仰せ付け、通信使通行にあたっての先触、派遣された役人からの問い合わせ書などの一括書類が収められている。

2. 備考

上関町古文書解説の会編。上関町教育委員会刊。1997年。

同じ通信使の往路に関する史料として、上関町古文書解説の会編『吉川藩正徳度朝鮮通信使来聘記』(上)(下)(上関町教育委員会、1997年)がある。

『牛窓町史』資料編1 美術・工芸・建築

1. 内容

本書には「朝鮮人渡海船之図」(個人蔵。以下特に断りの無い場合は同様)、狩野栄川「釜山富士」、「嵯路勝区図画集」(韓国国立中央博物館蔵)、「朝鮮通信使上関来航図」(山口県上関町超専寺所蔵)、「朝鮮人来朝覚備前御馳走船行烈図」、「尼崎藩の通信使迎接船図」(尼崎市桜井神社蔵)、「朝鮮通信使国書先導船屏風」、「朝鮮通信使御楼船図屏風」、「朝鮮通信使上判事第一船図」、「朝鮮通信使船松平隠岐守御馳走船図」、「朝鮮通信使上々官第三船図」、「朝鮮通信使川御座船図屏風」、「朝鮮通信使上々官船図」(宇和島伊達文化保存会蔵)、英一蝶筆「馬上揮毫図」などの他に朝鮮人の描かれた印籠や扇面などの器物を収録している。全てカラー図版で、適宜拡大写真も収載してい

る。

2. 備考

牛窓町史編纂委員会編。牛窓町刊。1996年。

『影印本 異国日記』

1. 内容

徳川家康—秀忠—家光の三代に仕え、幕府の外交文書起草に携わった南禅寺の住職金地院崇伝の手になる一括史料を、影印本により出版したもの。朱印船貿易を含む、近世前期における対外交渉に関する一級史料として知られている。

①「異国日記」〈上〉には、元和3年(1617)に朝鮮国の三官使が帰国の際に崇伝へ贈ったもの、同年朝鮮通信使から日本国王宛の書簡や徳川秀忠より朝鮮国王宛の返書、寛永元年(1624)の朝鮮通信使に関わる諸史料、寛永4年(1627)の「朝鮮へ韃靼侵入」の風聞についてなどが収録されている。

②「異国日記」〈下〉には、「韓使贈答日録」として、慶長度の通信使関係史料と、朝鮮国礼曹より柳川一件解決に関する書状を載せている。「日朝東覧」には朝鮮宛文書に使用する文言や書札礼に関する注記、寛永元年の朝鮮国王と徳川家光の往復文書、三使より金地院崇伝宛ての文書などが収録されている。他に元和度、寛永度、明暦度の通信使関係の文書群が収録されている。また、宗義成から朝鮮国礼曹宛ての文書(正保2年=1645、朝鮮より護送の漂着中国船の中にキリシタンを発見したとの報告)も見られる。

③「異国渡海御朱印帳」・④「異国近年御書草案」・⑤「異国御朱印帳」は、朱印状を発給地域ごとに並べたもので、末尾に「朝鮮日本より御音信物」が含まれている。

⑥「異国日記御記録雑記」は、正徳3年(1713)年に新井白石が寺社奉行を通じて金地院に「異国日記」を筆写提出させた経緯を記したものである。⑦「参考図版」を付す。

2. 備考

異国日記刊行会編『影印本 異国日記—金地院崇伝外交文書集成—』(東京美術、1988年)。底本は、金地院所蔵本。

『影印本 津島日記』

1. 内容

朱子学者、漢詩人である草場珮川が対馬滞在時に記した日記の影印本。記事は文化8年(1811)5月から7月までに至る。記述内容は対馬に関するもの、朝鮮通信使および朝鮮に関するものに分けられる。上中下の三巻三冊である。

上巻に対馬に関するものとして、「対馬島全図」「府中図」「府中湊図」をはじめとする絵図および「対馬島総説」として地誌の記述が収録されている。

中巻には朝鮮関係については朝鮮通信使の隊列を図示した「上使行列之略」「副上使行列之略」

や、馬上人物や楽隊、正使を乗せた籠などを描いた「信使鹵簿図」、朝鮮国王からの書簡、国書受け取りの次第などが収録されている。

下巻には国書の書札札を示す図や国書を収める箱の図、「客館図」(通信使の宿舎)「服飾図」「食器図」「韓船仰面図」「朝鮮仏像」などの絵図が収められている。また、後部には「平助国公碑碣」として永禄10年(1567)に以酌庵の僧が記した宗助国に関する碑文を収録している。

2. 備考

草場珮川著。秀村選三他編。西日本文化協会刊。1978年。

活字翻刻されたものが『草場珮川日記』の書名で刊行されている(別項参照)。

『江戸藩邸毎日記 対馬宗家文書第Ⅱ期』

1. 内容

対馬宗家文書シリーズの第Ⅱ期として、東京大学史料編纂所所蔵の江戸藩邸毎日記490冊をマイクロフィルム化したものである。「江戸藩邸毎日記」とは、対馬藩の江戸藩邸で記された日記である。寛永5年(1628)年から慶応3年(1867)年までのものが収録されている。別冊には、マイクロフィルム収録文書の目録とともに、慶応義塾図書館本『対馬宗家文書・雑集目録』や関連論考が収録されている。

2. 備考

田代和生監修。ゆまに書房刊。2001～2003年。

『愛媛県史』資料編 近世下

1. 内容

寛永20年7月7日「朝鮮使節馳走役」は、「加藤家年譜 上」にある朝鮮使節馳走役拜命に関するものである。「馳走役・朝鮮使節接待拜命」は、「藤蔓延年譜」にある延宝3年(1675)～文化5年(1808)までの参向の公家衆御馳走役や朝鮮使節の接待役拜命の記録である。「朝鮮使節接待諸経費」(浦上家文書)は、延享5年(1748)の朝鮮使節接待に掛かった経費の書上げである。

2. 備考

愛媛県史編さん委員会編。愛媛県刊。1988年。

『大磯町史』2 資料編 近世(2)

1. 内容

朝鮮通信使接待に関する史料を収める。①(享保5年=1720)3月「朝鮮通信使通行につき馬入船入用金の書上」、②延享5年(1748)6月「朝鮮通信使通行につき大磯宿助郷組合村々の人馬負担書上」、③宝暦14年(1764)正月「朝鮮通信使通行につき御用出役人の大磯宿旅館宿割書」、④宝暦14年正月「朝鮮通信使通行につき御用日記」の計4点を収録する。

2. 備考

大磯町編。大磯町刊行。1999年。

『岡山県史』第二十四巻 岡山藩文書

1. 内容

享保4年(1719)年の通信使関係史料を収める。岡山藩池田家文庫(岡山大学付属図書館所蔵)の一括史料「来朝帰帆共朝鮮人御用留帳」十～十六で、岡山藩がどのように通信使の応接に当たったかを詳細に知ることができる。通信使への書簡類、宿札、幕府との往復文書(通達と伺い)、対馬藩との往復文書、岡山藩役人への通達、不測の事態が起きた時への処置法などが記されている。

2. 備考

岡山県史編纂委員会編。岡山県刊。1982年。

『折りたく柴の記』

1. 内容

本書は、新井白石の自叙伝である。享保元年(1716)起筆。自身の生い立ちから時代情勢、幕府の政策、文芸などその記事は多岐にわたる。上中下の三冊本である。このうち中巻には朝鮮通信使に対する白石の考えの「大要」が述べられている。具体的には朝鮮との通交の歴史や「大君」「国王」号に対する諸意見が記されている。

2. 備考

新井白石著『折りたく柴の記』(岩波書店、1999年)。

『外交志稿』

1. 内容

明治17年(1884)外務省から刊行された対外交渉史。本文と年表の二分冊。編纂の端緒は、明治10年(1877)秋、同省記録局長渡辺洪基が外交事蹟の専書のないことを遺憾とし、時の外務卿寺島宗則・外務大輔鮫島尚信に建議したことに始まり、同年12月から同省御用掛北沢正誠(前修史局三等修撰)らが作業を開始し、約3年をかけて『日本書紀』以下の国書、中国・朝鮮などの外国史籍二百数十点を渉獵、国初から幕末の和親条約締結のころまでの外交の史実を編年体で記述し、14年稿を了え、これを『外交志略』と名づけた。その後3年改稿を重ねたが、なお十全を期し難いため、書名の「志略」を「志稿」に改め、いったん刊行することとした。本文の構成は、交聘・戦争・版図沿革・漂流・帰化移住・学術宗教・贈酬・貿易の八篇とし、これら各篇を朝鮮・漢土・肅慎渤海・西南諸国・欧羅巴諸国及亜米利加の国別に編述している。

なお、「巻十一 版図沿革篇第一 朝鮮」は古代の記述のみである。

〔本文編〕1冊

- ①巻一 交聘篇第一 朝鮮
- ②巻六 戦争篇第一 朝鮮
- ③巻十二 漂流篇第一 朝鮮
- ④巻十七 帰化移住篇第一 朝鮮
- ⑤第二十一 学術宗教篇第一 朝鮮
- ⑥第二十五 贈酬篇第一 朝鮮
- ⑦巻三十 貿易篇第一 朝鮮

〔年表編〕1冊

- ①巻三十七 年表第四
- ②巻三十八 年表第五

2. 備考

外務省記録局編。外務省刊行。1884年。本書は、本文編1冊・年表編1冊の合冊である。

国立国会図書館の近代デジタルライブラリーから閲覧できる。

『かいへんたい華夷変態』

1. 内容

「華夷変態」という書名は、明が滅ぼされ、清が代わって中国を統治するに至ったことに因んで名づけられた(林春斎「華夷変態序」)。中国船やオランダ船からの風説書が多く収録されている。中には対馬や薩摩からの注進も含まれており、当時の東アジア情報の集大成といえる。以下、朝鮮関係史料を摘録する。

巻一に「兵乱傳聞二通」として、「朝鮮東萊之人」が対馬で語った記事を書いている。ここには明の残党である呉三桂と清の攻防戦の有様が伝えられている。巻二には「呉三桂逆心企之次第」が、巻三には「朝鮮傳説二通」「対馬注進」「朝鮮国之風説」「朝鮮訳官覚書」が、巻四には「朝鮮風説」「唐乱に付朝鮮にての風説」「朝鮮訳官答対馬州家臣書」が、巻七には「宗対馬守朝鮮注進三通」「宗対馬守よりの注進」が収録されている。いずれも朝鮮経由で伝えられた明清交代に関する風聞である。

なお、下冊には「華夷変態」の続編である「崎港商説」三巻、島原市立図書館松平文庫の「華夷変態」第三十七巻、補遺、付録が収録されている。補遺では、内閣文庫本「華夷変態」に見られない記事を松平家所蔵本から摘録している。また付録には「島原本唐人風説書」、山口県文書館所蔵の唐人漂着史料四点を書いている。

構成は以下の通りである。

- ①上冊 巻一～巻十四(正保元年～貞享5年)
- ②中冊 巻十五～巻二十三(貞享5年～元禄9年)
- ③下冊 巻二十四～巻三十五(元禄10年～享保2年)、「崎港商説」巻一～巻三(享保2年～同7年)、松平家本「華夷変態」巻三十七(享保7年～享保9年)、補遺、付録

2. 備考

榎一雄編『華夷変態』(東方書店、1981年増補再版、初版は1958年)。

1958年の初版には、上記の「島原本唐人風説書」、山口県文書館所蔵の唐人漂着史料は収録されていない。

『^{かながわけんし}神奈川県史』資料編9 ^{きんせい}近世(6) ^{こうつう}交通・^{さんぎょう}産業

1. 内容

延享4年(1747)8月「朝鮮人来朝の節船橋架設につき書上」は、朝鮮使節通行のため酒匂川船橋御用を命ぜられた谷ヶ村が船橋架設御用の免除を小田原藩庁に願い出たものである。

2. 備考

神奈川県企画調査部県史編集室編。財団法人神奈川県弘済会刊。1974年。

『^{かぶきぎやくほんしゅう}歌舞伎脚本集』上 ^{じょう}

1. 内容

三種の歌舞伎の脚本が収録されている。そのうち、並木正三作「韓人漢文手管始」は明和元年(1762)、鈴木伝蔵による崔天宗殺害事件をモチーフにして創作されたもの。寛政元年(1789)7月17日に大坂で上演が開始された。崔天宗は「唐人組みの仲仕頭、西天の宗九郎」、鈴木伝蔵は「今木伝七」として劇中に登場する。

2. 備考

日本古典文学大系53。浦山政雄・松崎仁編。岩波書店刊。1960年。

『^{かめいなんめい}亀井南冥・^{しょうようぜんしゅう}昭陽全集』^{だいいっかん}第一巻

1. 内容

福岡藩の儒学者亀井南冥とその子昭陽の全集。第一巻に収録された「泱泱餘響」は、亀井南冥が宝暦13年(1763)に朝鮮通信使と筑前相島で対面した時の唱和・筆談の記録である。南冥と詩文の応酬にあたったのは書記官の南玉、成大中、元重挙、金仁謙の計4名である。

2. 備考

亀井南冥・昭陽全集刊行会編。葦書房刊。1978年。

底本は京都大学所蔵本(影印)で、九州大学所蔵本、慶應義塾大学所蔵本によって異同を示している。

『^{きつかわはんしやうとくちやうせんつうしんしらいへいき}吉川藩正徳度朝鮮通信使来聘記』

1. 内容

正徳度の朝鮮通信使(往路)の応接にかんする岩国藩吉川家の記録である。信使来聘の情報が伝えられると、通信使を迎えるにあたってどのような礼節をもって応接すべきか、あるいは食事の準備、通信使への贈物などに関して、他藩や幕府に伺い書を出すなどして、岩国藩では様々な情報を集積した。本書にはこうした瑣事にわたる伺い書に加えて、通信使への贈答の詩、上関に派遣された役人のリストなどが含まれている。

2. 備考

上関町古文書解読の会編。上関町教育委員会。1997年。

同じ通信使の復路に関する記録として、上関町古文書解読の会編『岩国藩(吉川家)正徳度朝鮮通信使帰帆記』(上関町教育委員会、1997年)がある。

『岐阜県史』史料編 近世7

1. 内容

①嘉永5年12月「墨俣宿御通行増方願書」は、嘉永5年(1852)、美濃路の墨俣宿から清須宿までの本陣・脇本陣が、近年特に減少した諸家の通行の回復を望んで道中奉行に嘆願したものである。その一文に「尤美濃路之儀は御上洛御通筋、御茶壺・紀州様御通行、其外朝鮮人・琉球人參向帰国共、定式之道筋、全東海道統ニて御用相勤来申候、」とある。

②享保3年5月「朝鮮人来朝格式申上書」は、翌享保4年(1719)の朝鮮使節来聘のため天和年中の施設迎接の格式について下問があったため、垂井村庄屋・年寄が天和・正徳の格式を上申するために作成した書付の案文である。

③付録第8図は、將軍家重の寛延元年(1748)6月、朝鮮信使洪啓禧の一行477人が美濃路の佐渡川(揖斐川)を通行した時に架けた舟橋の絵図である。

2. 備考

岐阜県編・刊。1971年。

『近世日本における外国使節と社会変容② 延享度『信使記録』を読む』

1. 内容

本書には、慶應義塾大学図書館所蔵「対馬宗家文書」のうち「延享五戊辰年信使記録 御参向御註進控 共ニ三冊地」の活字翻刻が収録されている。本史料は、延享度の通信使が対馬を出発して、江戸に到着するまでの対馬藩から幕府へ出された文書集である。

2. 備考

鈴木文・玉井達也編。紙屋敦之研究室刊。2007年。慶應義塾大学図書館所蔵『対馬宗家文書』は、マイクロフィルム田代和生編『朝鮮通信使記録 対馬宗家文書第I期』に収録されている。

『近世歴史資料集成』第2期 第3巻 日本産業史資料3 農業及農産製造

1. 内容

収録されている「朝鮮人参耕作記」は、朝鮮人参を育てるに当たっての手引き書。朝鮮人参を育てるのに適した土地や種の播き方、害虫、朝鮮産の人参と日本産の人参の比較などについて記している。また、本文の末尾においては、新井白石の『宝貨事略』を引用しながら朝鮮人参の輸入による金銀貨幣の国外流出に対して警鐘を鳴らしている記事が見られる。著者は田村元雄藍水で、本書は明和元年(1764)年刊行の小形版(初版は1748年)。

2. 備考

浅見恵・安田健訳編。科学書院。1991年。

『草場珮川日記』

1. 内容

肥前国多久出身の朱子学者草場珮川の日記を活字翻刻したもの。古賀精里との交流や日々の読書メモ、写本記録など内容は多岐にわたる。

上巻には、文化元年(1804)から文政5年(1822)までの18年間の記事が収められている。弘道館に入学してから多久藩主に仕えるまでの日々や、対馬に遊学し文化度の朝鮮通信使と会見する場面などが含まれている。日記は冊子ごとに「入学日録」「日新私乗」「附驥日記」「津島日記」「対礼余藻」などの題名が与えられている。このうち、「附驥日記」「津島日記」「対礼余藻」は文化8年(1811)、草場珮川が古賀精里らに随行して対馬に赴いた際の記録である。「附驥日記」「津島日記」には対馬および朝鮮の風土や産物、人物や歴史、通信使との会見の様子が、「対礼余藻」には通信使と交わされた漢詩がまとめられている。

下巻には、文政5年から安政4年(1857)までの36年間の記事が収められている。文政5年から天保半ばまでの記事は多久家に仕えていた時のもの。天保期以後の記事は佐賀藩の藩校弘道館で教鞭を執っていた時のものである。

2. 備考

上下2冊。三好不二雄監修。西日本文化協会刊。1978・1980年。

本書で翻刻されている「津島日記」の絵図は省略されている。絵図に関しては、『影印本 津島日記』(別項参照)で見ることができる。

『交隣須知』

1. 内容

韓語学習帳「交隣須知」を影印し、解題および索引を付したのが本書である。対馬藩の訳官が作成したものに雨森芳洲が手を加えて成立したものであると言われている。明治期に至るまで改訂が加えられ、数多くの異本が残されている。本書で影印されたのは京都大学文学部言語学研究室所蔵本で、

Ⅲ. 近世

江戸期に作成された写本である。四巻四冊で、「天文」「時節」「昼夜」といった事項別に分けられている。単語の下にハングルおよび片仮名で用例が示されている。

2. 備考

京都大学国語学国文学研究室編。京都大学国文学会刊。1966年。

『湖西市史』史料編1、史料編3

1. 内容

①「朝鮮人来朝関係歎願書扣」(史料編1の24)は、宝暦12年(1762)の「乍恐書付を以奉願上候」という表題で、井上河内守領分遠江国敷地郡八ヶ村惣代が道中奉行に宛てて来る朝鮮人来朝の節、矢来詰人馬差出の免除を願い出たものである。

②「明和元年、朝鮮人参向に関する覚」(史料編3の34)は、明和元年(1764)申11月付、遠州敷知郡新所西方村庄屋の庄兵衛ほか3名から菅沼幾右衛門・渡辺伝蔵に宛てた、新所西方村が朝鮮人往来時に新居宿人馬役、船役、諸品差上を勤めることを約した「覚」である。

2. 備考

湖西市史編さん委員会編。静岡県湖西市刊。1979・1982年。

『越谷市史』四・史料二、続史料編(一)

1. 内容

①「十三 朝鮮人来朝之事」(四・史料二所収)は、朝鮮使節に対する人馬提供の史料。②「朝鮮人来朝帰国御入用国役金之事」(続史料編(一))は、明和元年(1764)の朝鮮使節のための国役金の史料。

2. 備考

越谷市役所編・刊。1972・1981年。

『古事類苑 外交部』

1. 内容

古代から幕末にいたるまでの各国との交渉史料を項目ごとに編年順に収めた史料集。

外交部一～二十五までの計二十五部に区分されている。外交部一は「外交総載」(外交に関する総括)で、二～十一には朝鮮、十二～十五までは中国、十六～十七には東南アジア、十八～二十四まではヨーロッパ、二十五にはアメリカ関係の外交史料が翻刻されている。以下、江戸期の日朝関係に関する史料について解説する。

外交部八(朝鮮一)には、朝鮮国号のこと、室町期の足利氏による朝鮮との通交、文禄の役・慶長の役に関する記事が、外交部九(朝鮮二)には文禄・慶長の役以後、徳川氏による日朝関係修復の記事

や通信使関係の記録が、外交部十(朝鮮三)には宗氏による朝鮮との通交記事(室町～明治まで)が、外交部十一(朝鮮四)には「貿易」「和館」「以酌庵」「竹島交渉」「社寺募縁」(社寺修復費の勧進を募る文書)「詩文贈答」「漂流」「雑載」の記事がそれぞれ収録されている。

2. 備考

- ①神宮司庁編『古事類苑 外交部』(宇治山田、1903年)。
- ②神宮司庁編『古事類苑 外交部』(古事類苑刊行会、1930年)。
- ③神宮司庁編『古事類苑27-28巻 外交部』(普及版、古事類苑刊行会、1933～1934年)。
- ④神宮司庁編『古事類苑22 外交部』(4版普及版、吉川弘文館、1967年)。
- ⑤神宮司庁編『古事類苑26 外交部』(4版、吉川弘文館、1969年)。

『こんとうせいさいぜんしゅう近藤正齋全集』

1. 内容

近藤重蔵(号は正齋。諱は守重)の著作を集め、解説を付したもの。重蔵は、松前蝦夷御用取扱として蝦夷地探検に従事した人物として有名である。御書物奉行として勤めていたこともあり、幕府の文庫に所蔵されていた貴重な書籍を利用して多くの著作を残している。

第一巻に、「外蕃通書」(全二十七冊)が収録されている。本書は各国との外交文書に重蔵による考察を付したものである。この「外蕃通書」の第一冊～第五冊には「朝鮮国書」(年次は慶長12年～宝暦14年)、第六冊～第七冊には「阿蘭陀国書」(慶長14年～安永8年)、第八冊～第十冊には「明国書」(慶長15年～延宝6年)、第十一冊～第十四冊には「安南国書」(慶長6年～元禄7年)、第十五冊～第十七冊には「暹羅国書」(慶長11年～貞享4年)、第十八冊～第十九冊には「柬埔寨国書」(慶長8年～寛保2年)、第二十冊には「占城国書」「太泥国書」「田彈国書」(慶長年間)、第二十一冊～二十三冊には「呂宋国書」(慶長6年～慶長18年)、第二十四冊～第二十五冊には「阿媽港書」(慶長14年～元和7年)、第二十六冊には「新伊西把你亞国書」(慶長17年～寛永元年)、第二十七冊には「漢又利亞国書」(慶応13年～元和12年)が収録されている。

「朝鮮国書」所収の文書に関しては『異国日記』や『通航一覽』(別項参照)所収のものと重複するものが多い。重蔵による解説文の中には朝鮮通信使の始まりについて、柳川一件(対馬藩による国書改ざん事件)、正徳年間(1711～1715)の「国王」号に関する一件などへの言及がみられる。

2. 備考

国書刊行会編・刊。1976年復刻。

「外蕃通書」については、『改訂史籍集覧』第二十一冊(近藤活版所、1901年)に活字翻刻がある。

『しみずしししりょう きんせい きんせい清水市史』資料 近世1、近世3

1. 内容

江尻本郷町の御三家の一つと呼ばれた分限者、佐藤家の文書を収録する。佐藤家は油屋を営む

Ⅲ. 近世

かたわら、江戸中期から百姓代、組頭、名主役を勤めた家である。正徳元年(1711)から天明6年(1786)までの朝鮮使節通行に利用される富士川の渡船・人足提供に関する富士川西岸岩渕村、興津・江尻・清水各港の請負証文・覚書である。

①近世1〔二七〕正徳元年卯7月11日「富士川船橋役船につき本郷町より岩渕村請人へ「手形之事」」など計13点が収録されている。

②近世3〔六九〕享保4年(1719)亥ノ5月「朝鮮人来朝勤方御尋につき谷津村名主二名より下山甚内へ「覚」

2. 備考

清水市史編さん委員会編。刊行は、吉川弘文館。1966・1967年。

『しもかまがりちやうし しりやうへん下蒲刈町史』資料編

1. 内容

第二章第一節に「朝鮮通信使と三之瀬」として朝鮮通信使の使行録より、三之瀬周辺を通行した際の記録が収録されている。慶長12年(1607)の慶七松「海槎録」から享保4年(1719)の申維翰「海游録」まで20点の史料が収められている。

2. 備考

下蒲刈町史編纂委員会・呉市史編さん委員会編。呉市役所刊行。2004年。

底本は、いずれも『海行総載』である。

『しものせきしし しりやうへん下関市史』資料編1

1. 内容

明治七年から山口県によって編纂が開始された『豊浦藩旧記』の内、①「朝鮮人漂着通路護送」は第八十八冊、②「朝鮮国信使饗応記」は第八十九冊、③「朝鮮人漂着吉母浦・松谷浦応接書」は第九十冊を翻刻したもの。

①は、朝鮮人漂着へ対応する際の心得および文書類の雛形を含む。さらに文政13年(1830)萩領への朝鮮人漂着の際の対応を例として挙げている。

②は、宝暦期の通信使の応対に関する史料である。

③は、漂着朝鮮人との筆談による応接を記した史料である。

2. 備考

下関市史編修委員会編。下関市刊行。1993年。

『清見寺所蔵 朝鮮通信使遺物目録』

1. 内容

慶長12年(1607)と寛永元年(1624)年に朝鮮通信使が宿泊した清見寺(静岡市清水区興津清見寺)に遺された書蹟・文物をカラー複製し、韓国語訳・および和訳を付したものである。清見寺は寛永度以降、宿泊所としては利用されなくなったが、通信使の休憩所としては利用され続けた。そのため本寺には朝鮮通信使の文物が多く遺されている。本書には、詩箋51点、懸板・扁額18点、絵画1点、屏風・掛幅3点、その他日記・書状等7点、工芸1点が収録されている。呂祐吉・慶暹・丁好寛(慶長度通信使)による詩文をはじめ明暦度・正徳度・寛延度・明和度のものまでが含まれている。

また本書には、「周辺寺院資料」として清見寺以外に遺された通信使資料も掲載されている。

2. 備考

朝鮮通信使文化事業会刊行。2006年。

『全一道人の研究』

1. 内容

対馬藩儒者の雨森芳洲によって編集された韓語学習帳「全一道人」に関する総合的な研究。①「全一道人の研究」は、雨森芳洲著「全一道人」の書誌、情報源などについて検討し、解説を加えたものである。②「全一道人釈文」は、「全一道人」の釈文に韓語訳を加えたものである。③「全一道人勸懲故事」は、雨森芳洲著「全一道人」の粉本(典拠)である汪延訥「全一道人勸懲故事」を影印したものである。「全一道人勸懲故事」の著者は明代の劇作家汪延訥である。④「全一道人」は、「全一道人」の影印である。享保14年(1729)成立。「序」および「凡例」には韓語学習法に関する芳洲の見解などが簡潔にまとめられている。本文には、忠臣・孝子・節夫などに関する教訓的な説話が和文によって示され、その脇に韓語による発音が片仮名およびハングルで表記されている。

2. 備考

京都大学文学部国語学国文学研究室編。京都大学国文学会刊行。1964年。

底本は、雨森芳洲文庫(滋賀県伊香郡高月町)所蔵の自筆写本。

『増補 朝鮮信使来朝帰帆官録』

1. 内容

石阪孝二郎氏が昭和44年(1969)に編集・刊行した『朝鮮信使来朝帰帆官録』の増補版。

①石阪孝二郎編『朝鮮信使来朝帰帆官録』は、宝暦12年(1762)3月9日～明和2年(1765)正月20日までの兵庫津の記録で、宝暦度朝鮮使節が来着と帰国のときの送迎状況を詳細に記している。同史料からは、上は幕府より派遣の代官、尼崎藩の家老、同兵庫津町奉行、下は名主、町人にいたるまで、その接待準備のため、如何に細心に心を用い努力したかを示す史料である。

②「宝暦物語」巻一～一〇は、宝暦度信使一行の始終の行動を記した物語風単行本である。

③『宝暦度兵庫津朝鮮通信使関係史料—岡本俊二文書にみる増補史料—』は、現西宮市にあたる瓦林組大庄屋であり上瓦林村庄屋兼帯の岡本家に伝わる古文書のうちの朝鮮使節に関するものである。時期は延享5年(1748)から文化8年(1811)の史料である。

2. 備考

石阪孝二郎編。明石書店刊行。1992年。

①の原史料は、兵庫津岡方惣会所蔵の「朝鮮人来朝帰帆官録」上、中、下3冊。②の底本は、国立国会図書館本「宝暦物語」。③は、「岡本俊二文書」の朝鮮使節関係史料の一部である。

『ぞくあめのもりほうしゅうがいこうかんけいしりょうしゅう続雨森芳洲外交関係資料集』

1. 内容

対馬藩の儒官、雨森芳洲に関する史料集の続編である。

①「裁判記録四」(お茶の水図書館蔵)には、芳洲が裁判として釜山滞在中に対馬藩庁との間に交わされた往復書簡が収録されている。

②「信使一件并集書」(雨森芳洲文庫蔵)は、朝鮮通信使に関する覚書。前半部は、正徳年の通信使に関する記述で、後半は、宝永年間(1704～1710)の年例送使や朝鮮宛書簡に用いる言葉に関するメモ、延享5年(1748)年の通信使に関する芳洲の意見書などが収録されている。

③「芳洲了簡書」(大韓民国国史編纂委員会蔵)は、対馬藩財政の窮乏について述べた資料。藩財政が窮乏した理由、およびその対策などが述べられている。

④「朝鮮詞稽古御免帳」(大韓民国国史編纂委員会蔵)は、享保5年(1720)、芳洲によってはじめられた朝鮮語通詞の養成制度の実態と、通詞たちの消長を伝える資料。

⑤「交隣大昕録」(雨森芳洲文庫蔵)は、日朝通交に関する覚書を編集したもの。日朝外交文書の作成を司った以酌庵の記録をもとに作成されたものと考えられている。その内容は外交文書作成に当たって使用する漢字のメモや、朝鮮との通交の歴史、年例送使船に付して送られる書契や別幅などに関するメモ、延宝8年(1680)に作成された「倭館壁書」などである。

⑥「送使約条私記」(雨森芳洲文庫蔵)は、年例送使に関する覚書。朝鮮側の接待に関する記事、接待料、公宴料、進上物、公貿易品、返礼物などの目録が付されている。

⑦「義真公御家譜」(対馬厳原町禮泉院蔵)は、宗氏第二十一代、義真の一代記。藩政・日朝関係・民俗などの記事を含む。

⑧「和交覚書」(長崎県立対馬歴史民俗資料館蔵)は、日朝通交に関する覚書。

2. 備考

関西大学東西学術研究所資料集刊11-4、雨森芳洲全書4。関西大学東西学術研究所「日中文化交流の研究」歴史班編。関西大学刊行。1984年。

『続々日本絵巻大成』伝記・縁起篇8 東照社縁起

1. 内容

徳川家康の一代記と日光東照社の創建の由来を絵巻に記したもの。寛永16～17年(1639～1640)成立で、全五巻からなる。この中の第四巻の第四段に「朝鮮人」の項がある。詞書には、朝鮮通信使(寛永度)が日光に参詣し、その時の感慨が記されている。さらに、後部には正使白麓(任統)、副使東溟、従事官青丘の七言律詞が載せられている。絵図には、輿に乗る正使と副使、馬に乗る女官や笛や太鼓の楽隊一行の姿が描かれている。通信使一行の先頭は、東照宮の一の鳥居に到達しようとしている。

2. 備考

小松茂美編。中央公論社刊行。1994年。

カラー図版、釈文、解説が付されている。底本は日光東照宮所蔵。

『大系朝鮮通信使 善隣と友好の記録』

1. 内容

朝鮮通信使関係史料が編年で収録されている。全八巻。各巻に論文、通信使関連著作・論文目録が付されている。

各巻ともに前半に絵巻などの絵画史料を、後半に朝鮮通信使の使行録(影印)を収録している。絵画史料の中で、有名なものに関してはほぼ網羅している。例えば第二巻に「朝鮮通信使行列絵巻」(ロンドン大学アジア・アフリカ研究所蔵)、第三巻に「朝鮮通信使行列図巻」(ニューヨーク市立博物館スペンサー・コレクション蔵)などが収録されている。また、通信使らが日本に残した書額、絵画類も翻刻とともに掲載されている。

以下に、本シリーズに収録されている使行録の影印本の中で、朝鮮古書刊行会による刊本『海行摠載』から影印されている史料以外を挙げる。

- ◎第一巻: 朝鮮礼曹「海行録」(ソウル大学校奎章閣蔵)、朴梓「東槎日記」(ソウル大学校奎章閣蔵)
- ◎第三巻: 趙珩「扶桑日記」(ハーヴァード大学燕京研究所Chinese-Japanese Library蔵)
- ◎第四巻: 趙泰億「東槎録」(別編『謙齋集』所収、ソウル大学校奎章閣蔵)、李邦彦「東槎録・内題『東槎日記』」(所蔵は同前)、金顕門「東槎録」(京都大学附属図書館蔵)
- ◎第五巻: 洪致中「東槎録」(京都大学附属図書館蔵)、申維翰「海游録」(天理大学附属天理図書館蔵)、金滄「扶桑録」(韓国国立中央図書館蔵)
- ◎第六巻: 曹蘭谷「奉使日本時間見録」(ソウル大学校奎章閣蔵)、洪景海「随槎日録」(所蔵は同前)
- ◎第七巻: 成大中「日本録」(高麗大学校図書館蔵)、元重挙「乗槎録」(高麗大学校六堂文庫蔵)、金仁謙「日東壯遊歌」(ソウル大学校奎章閣蔵)
- ◎第八巻: 金履喬「辛未通信日録」(金同圭氏蔵)、柳相弼「東槎録」(高麗大学亜細亜問題研究所蔵)

蔵)

巻の構成は、以下の通りである。

- ①第一巻 丁未・慶長度、丁巳・元和度、甲子・寛永度(1996年)
- ②第二巻 丙子・寛永度、癸未・寛永度(1996年)
- ③第三巻 乙未・明暦度、壬戌・天和度(1995年)
- ④第四巻 辛卯・正徳度(1993年)
- ⑤第五巻 己亥・享保度(1995年)
- ⑥第六巻 戊辰・延享度(1994年)
- ⑦第七巻 甲申・宝暦度(1994年)
- ⑧第八巻 辛未・文化度(1993年)

2. 備考

辛基秀・中尾宏編。明石書店刊行。1993～1996年。

『千葉縣史料』近世篇 佐倉藩紀氏雜録

1. 内容

「天保校訂 紀氏雜録」は佐倉藩主堀田正亮の時、家譜・系譜の編さんが始められ、明和3年(1766)、藩主正順の時一応この仕事は完了した。しかし、その後も増補校訂作業が進められ、天保7年(1836)に完成した。

①「紀氏雜録一」は、延享5年(寛延元年、1748)の朝鮮使節が江戸城に登城した際の出来事が記される。

②「紀氏雜録三」は、天和2年(1682)の朝鮮使節の江戸での動向、朝鮮国王の書簡の文言と包紙の図、ならびに国王への返書の文言と包紙の図、堀田正俊の書簡の写しが記載される。

2. 備考

千葉県企画部広報県民課編。千葉県刊行。1984年。

『朝鮮人道見取絵図』

1. 内容

東京国立博物館所蔵の「五街道分間延絵図」(全103巻)を複製したシリーズのうち、「五街道分間延絵図」は幕府の命によって道中奉行らによって作成され、文化年間に完成した街道絵図である。

本書に収められているのは通信使が利用した「朝鮮人(街)道」を鳥瞰した街道絵図「朝鮮人道見取絵図」をカラー複製したものである。なお、朝鮮人道というのは、通信使が本街道を離れて通行する、近江の一部の通路のことを指す。

2. 備考

児玉幸多監修。東京美術刊行。1990年。

『朝鮮通交大紀』

1. 内容

対馬藩儒官の松浦允任(霞沼)が編集した日朝関係史料集で、享保10年(1725)年の序文が付されている。撰述の目的は、朝鮮側が対馬に対してどのような態度であるか、対馬が朝鮮に対しどのような対応をとるべきか、そして対馬と朝鮮の関係の沿革を幕府に対し、いかに報告すべきかを記すことにある。

巻一から巻八までは応安元年(1368)より正徳6年(1716)年までの高麗・朝鮮と日本との間に取り交わされた文書を編年体にならべ、松浦允任による解説文および和訳(大意)が載せられている。巻九および十には天正18年(1590)、豊臣秀吉のもとを訪れた通信使・金誠一(鶴峰)による記録『海槎録』が収録されている。

2. 備考

田中健夫・田代和生校訂『朝鮮通交大紀』(名著出版、1978年)。

底本は、国立公文書館内閣文庫所蔵本と長崎県厳原町宗家文庫所蔵本(いずれも10冊本)である。前者は全文翻刻し、後者は前者に見られない部分のみを翻刻している。

『朝鮮通信使絵図集成』

1. 内容

朝鮮通信使に関わる絵図資料が収録されている。例えば、紀州徳川家旧蔵の享保4年(1719)「朝鮮国書捧呈行列図巻」(個人像)などの通信使絵巻や、金明国筆「寿老図」(大和文華館蔵)といった通信使の書き遺した画幅が数多く掲載されている。絵図資料に関しては、本書より後に編集された、辛基秀・中尾宏編集『大系朝鮮通信使 善隣と友好の記録』(明石書店、1993～1996年)と重複するものが多い。

2. 備考

辛基秀ほか編。講談社刊行。1985年。

『朝鮮通信使記録 対馬宗家文書第Ⅰ期』

1. 内容

各地に分散して保存されている対馬宗家文書をマイクロフィルム化したのが「対馬宗家文書」シリーズである。その第Ⅰ期には、朝鮮通信使関係の記録をマイクロフィルムで収め、別冊を付す。別冊は、慶応義塾図書館、東京国立博物館、大韓民国国史編纂委員会所蔵の対馬宗家文書から、通信使記録をピックアップして解説を附したものであり、マイクロフィルム目録および関連論考から成る。

なお別冊下には、中世・近世日朝交流関係史料として『大閣秀吉朝鮮征討起本』(大韓民国国史編纂委員会所蔵)、『家康公初命和睦次第并信使来朝事』(大韓民国国史編纂委員会所蔵)、『家康公命和睦朝鮮対馬送使約条相定次第并対馬私記』(東京国立博物館所蔵)、『方長老上京日記』(東京

国立博物館所蔵)が翻刻ないし影印されている。これらは近世初期の外交僧規伯玄方が藩主宗義真に献上したもので、中世対馬島における日朝通交貿易の実態、両国の関係を断絶した文禄・慶長の役、その後の講和交渉など、中世末・近世前期における日朝関係を見る上での重要史料である。

2. 備考

田代和生編。ゆまに書房刊行。1998～2000年。

『朝鮮物語』^{ちようせんものがたり}

1. 内容

萩藩の松原新右衛門の著作。享保13年(1728)序。本書は、対馬藩の大通詞を経験したことがあり、朝鮮の事情に精通していた松原新右衛門という人物によって著された書物である。松原新右衛門は、正徳元年(1711)および享保4年(1719)の2度にわたって通信使に随行して江戸に参府している。

朝鮮の言語・歴史・地理・風俗や政治情勢、風聞、産物や対馬藩と朝鮮との外交事務などについてかなり詳細に記されている。また、彼が朝鮮滞在中に得た和館の様子、朝鮮人の言葉など、実体験に基づいた情報も多く含まれている。

2. 備考

小林茂『漂流・漂着からみた環東シナ海の国際交流』(平成8年度 科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書、1997年)に収録。

「朝鮮物語」と題する書物は、大河内秀元「朝鮮物語」、木村理右衛門「朝鮮物語」(別項参照)、そして、松原新右衛門「朝鮮物語」(本書)の三種が確認されている。

『朝鮮物語』^{ちようせんものがたり}

1. 内容

寛延3年(1750)に江戸で出版された書物。作者は東都(江戸)芝濱松町二丁目に住む木村理右衛門。序文を草したのは沖慶子である。木村理右衛門も沖慶子も、本書の性質は朝鮮に関する啓蒙書であるとしている。全5巻5冊で、その内容を以下、巻次ごとに示す。

①巻一には、「朝鮮国由来の事」「朝鮮より日本へ始て来朝の事」「三韓日本に属する事」「高麗国王健が事」「大明国日本と和平によりて朝鮮より日本に和を乞事」の項目立てがなされ、朝鮮国の由来と日本との交隣の始まりについて記述している。

②巻二には、「朝鮮陣起の事」「加藤小西朝鮮国先陣の事」「大明国より援の兵来る事」「沈惟敬和義を調ふる事」「太閤再び朝鮮を攻給ふ事」「秀吉公耳塚を築給ふ事」の項目立てがなされ、二度にわたる豊臣秀吉による朝鮮出兵についての記述がなされる。

③巻三には、「越前国船頭韃靼へ漂着の事」「日本人だつたんに逗留の事」「日本人朝鮮へ到着の事」「倭人挑戦の郭中見物の事」の項目立てがなされる。これらは寛永21年(1644)に越前三国の船頭竹内藤右衛門が松前に向う途中、難船し韃靼に漂着し、奉天、北京、そして朝鮮を経て帰国するまで

の記録である。

④巻四には、「日本人朝鮮に越年の事」「看忠と朝鮮大明物語の事」「倭人帰国の願并人参取様の事」「日本人朝鮮発足の事」「漂泊人日本へ帰岸再び故郷へ帰る事」として、引き続き越前三国の船乗りたちの記録が載せられている。

⑤巻五には、「朝鮮国渡海の図」「朝鮮国八道の図」「朝鮮八道郡府州縣の事」「朝鮮官職考」「朝鮮の国語」「朝鮮土産の事」として、朝鮮の地図や地理、官職、および言語に関する記述が収録されている。

2. 備考

京都大学文学部国語学国文学研究室編『木村理右衛門著 朝鮮物語』。京都大学国文学会刊行。1970年。

『通航一覽』

1. 内容

嘉永6年(1853)に大学頭林樞(あきら)が中心となって外交関係文書集として編纂した史料。本書編纂の目的は諸国と「我邦来往の由」(諸国との交際の由緒)を知るためであると編者によって述べられている(「凡例」)。なお、収録史料の年代は永禄9年(1566)を上限とし、下限は「異国船打払い令」の出された文政8年(1825)となっている。

『通航一覽』原本は本編322巻、附録23巻、絵図1帙、凡例総目2巻から構成され、編者によりたてられた項目は以下のようになっている。すなわち、琉球国部(巻之一～二十四)、朝鮮国部(巻之二十五～百三十七)、長崎港異国通商総括部(巻之百三十八～百六十九)、異国渡海総括部(巻之百七十)、安南国部(巻之百七十一～百七十八)、南蛮部・南蛮総括部(巻之百七十九～百九十七)、唐国総括部・唐国(巻之百九十八～二百三十八)、阿蘭陀国部(巻之二百三十九～二百五十一)、諳厄利亜国部(巻之二百五十二～二百六十二)、柬埔寨国部(巻之二百六十三～二百六十四)、暹羅国部(巻之二百六十五～二百六十九)、芝萊国、淳泥国部(巻之二百七十)、田弾国・巴旦国部(巻之二百七十一)、爪哇国部、萬老高島部、大人国部、小人国部(巻之二百七十二)、魯西亜国部(巻之二百七十四～三百二十一)、北亜墨利加国部、安悶島部、異国部(巻之三百二十二)、海防部(附録巻之一～二十三)である。

これらの国の配列については編者によって附された「凡例」が参考になる。つまり、序列についてはその国が来航した年によって決めているが、「琉球は我附庸、朝鮮は隣好の與国なれば、諸国のはじめにこれを位置し、長崎港異国通商総括の部、及び異国渡海総括の部は、彼の二国の外、諸蕃来往の総括たれば、其次となし(後略)」「(凡例)」としている。国ごとに記載内容は異なるが、概ねその国の歴史、通航の由緒、漂流・漂着などの事項が記されている。

以下に朝鮮国部の内容を抄出する。

①第一巻には、「修好始末」「宗氏通信御用」など通信使関係記録が収録されている。なお、「修好始末」のはじめには檀君神話にはじまる朝鮮国の歴史が附されている。

②第二卷には、「信使来聘に付町触等」「信使参向道中」「信使着館并滞留中御扱」など、通信使に対する処遇に関する法令などが収録されている。

③第三卷には、「信使駿城并江戸西城登營」「聘礼済出仕附献上物、御馳走人拝謁等」「両国書并儀物信使御暇等」「筆談唱和等」「貿易」「変事注進并慰問」「漂流」など、引き続き通信使に関する史料が収録されている。「変事注進并慰問」は対馬宗氏から幕府に進上された風説書で、例えば、明清交代に関する風聞(呉三桂の反乱など)が収録されている。

④第四卷には、「漂着」「竹島」が収録されている。「漂着」では朝鮮から日本への漂着例を挙げている。また、「竹島」の項では「朝鮮通交大紀」や「異本朝鮮物語」などを引用して竹島に関する諸説をまとめている。

本書は、史料の質・量ともに一級であり、まさに「通航」を「一覧」する史料集の名に恥じないものである。しかしながら問題点もある。本書はあくまで幕府が把握する事ができた範囲での史料集であり、朝鮮人の日本漂着、日本人の朝鮮漂着の事例を例に取ると、対馬藩の史料を元に収集した池内敏の研究によれば、『通航一覧』所収の事例を大幅に超える事例が確認されている。また、『通航一覧』は様々な史料から関係史料を切り貼りして作成した史料集であるため、逐一原典にあたる必要がある。また、翻刻に当たって原本の体裁を考慮していないという点にも注意する必要がある。

2. 備考

国書刊行会刊行。1912～1913年。復刻版は、清文堂より1967年に刊行。

『通航一覧續輯』

1. 内容

『通航一覧』の続編で、安政3年(1856)ごろに成稿したと考えられている。

朝鮮関係史料については第一巻に翻刻されている。内容は「宗氏通信御用」(対馬宗氏による通信使来聘の要請)、「潜商刑罰」(天保7年、竹島で交易を行った者に対する処罰1件)、「漂着并漂流」(朝鮮から日本への漂着記事、日本から朝鮮への漂流記事)などである。

構成は以下の通りである。

- ①第一巻: 卷之一～四 琉球国部、卷之五～六 朝鮮国部、卷之七 南蛮総括部・同呂宋国部、卷之八～三十二 唐国総括部
- ②第二巻: 卷之三十三～四十六 唐國部、卷之四十七～六十三 阿蘭陀國部
- ③第三巻: 卷之六十四～八十 諳厄利亞國部、卷之八十一 暹羅國部、卷之八十二～八十三 巴旦國部、卷之八十四～一〇三 魯西亞國部
- ④第四巻: 卷之一〇四～一四二 北亞墨利加部、卷之一四三～一四五 佛朗西國部、卷之一四六 弟那瑪尔加部、卷之一四七～一五二 異國部
- ⑤第五巻: 附録卷之一～二十六 海防部

2. 備考

箭内健次編。清文堂出版刊行。1968～1973年。

底本は内閣文庫所蔵の草稿本で、適宜東京大学史料編纂所所蔵の清書本(旧外務省所蔵本)、東京国立博物館所蔵本を参照している。

『対馬叢書』

1. 内容

①『対州編年略』は、対馬の歴史を年表風にまとめた著作で、享保16年(1731)の成立である。著者は対馬の人藤定房。「凡例」によると、記事は神武天皇から中御門天皇の時代まで、つまり開闢から18世紀前半までにわたっている。執筆にあたっては、書物からの引用に加えて民間における伝承も採用している。「凡例」には歴代の対馬守の名前が所載されている。

簡潔なものではあるが、元治年間に倭寇が朝鮮を襲ったとの記事や、朝鮮通信使来聘の記事などが含まれている。

②『津島紀事』上・中・下は、19世紀はじめに完成した対馬の地誌である。文化3年(1806)年、通信使の聘礼にあたって対馬を訪れた幕吏土屋帯刀の命によって対馬藩士で郡奉行の平山東山が著述したのが本書である。原本は十一巻、付録二巻。

巻之一には「序」「凡例」「目録」とともに、「統体」として島の名称や面積、石高、歴史などが載せられている。巻之二には「州治」として、国府の地理歴史が記されている。巻之三から巻之十までは対馬各村の地理歴史が記されている。なお、この中には神社や寺の沿革が含まれている。巻之十一は「土産考」として対馬の特産物や動植物に関する記述がある。付録二巻には対馬にある棟札や梵鐘などの金石文を載せている。

付録二巻の中には朝鮮から贈られた梵鐘の銘文や銅印の図などが収録されている。これらの器物は、現存していないものも多くあるため、大変貴重な資料である。

2. 備考

鈴木棠三編。東京堂出版刊行。1972～1973年。

『対馬叢書』

1. 内容

①『宗氏家譜略』は、初代宗知宗から廃藩にいたるまでの系譜、系図、事跡が記された書物である。各人物の花押や印影の写しなども収録されている。成立年代は不詳、編者は立花氏清。

②『対州藩覚書』には、宗氏の家紋、判物類、花押、家臣の緒役在任期間などが記されている。文政年間(1818～1829)の成立で、田代代官所の下役、佐藤恒右衛門による編であると考えられている。「田代覚書」も同じく佐藤恒右衛門による編で、文政8年(1825)の成立。対馬藩田代領の統治にあたって必要な条項を一書にまとめたものである。

③『十九公実録』は唐坊長秋が撰述した宗氏の実記。書名には「十九代」とあるが、現存している写本では初代宗知宗から第10代成織までの記述しか残されていない。内容は、各人物の事跡となってい

るが、中には朝鮮関係の記事が含まれている。「宗氏家譜」は宗氏22代義真が家臣に命じて編修させたもので、執筆は陶山訥庵であった。全3巻で、第1巻には初代知宗から将盛までの15名、第2巻には晴康から義智までの7名、第3巻には義成の合計23名の事跡が記されている。特に、豊臣秀吉による朝鮮出兵およびその後の和親交渉、通信使に関する記述については詳細である。

④『対馬人物志』は、藩主・家老・武士・僧侶・文人らの人格、事跡等を解説した人名辞典である。

⑤『対馬志士』は、幕末期、佐幕派の中心人物である勝井員周が勤皇家200人余りを惨殺した事件の記録である。

⑥『閑窓独言』は、対馬の医者古藤文庵が記した随筆集。成立は明和期(1764～1771年)で、315話ほどが収録されている。江戸や大坂に関する風聞や対馬の歴史など記述内容は広範にわたる。朝鮮語習得、倭館館主に関する記述なども含まれている。

⑦『象胥紀聞』は、対馬の象胥(通詞)によってまとめられた朝鮮の国情を体系的にまとめた著書。上中下の3巻本である。上巻には朝鮮の歴史、朝廷における儀式、各都市や道について、中巻では節句、人物、官制、下巻では戸籍や武備、刑罰、度量衡、衣食住、産物および朝鮮に関する風聞を収めている。

2. 備考

鈴木棠三編。村田書店。1975～1979年。

『豊橋市史』史料篇5、史料篇6

1. 内容

①史料篇5「御橋御掛直シ・御修覆・御見分御用覚」は、吉田大橋成立当初(元亀元年、1570)より幕末に至る間の掛直し、修覆、見分などの記録を書き留めたものである。解説によれば、宝暦11年(1761)頃に従来の記録をもとに作成し、以後その都度書き継がれたものである。朝鮮使節関係記事としては正徳元年(1711)に「朝鮮人来朝ニ付」、橋の普請がなされたことが記されている。その後も延享4年(1747)条にも同様の記事がある。

②史料篇6「御城主御代々御差出シ書状扣」は、元禄10年(1697)より享保14年(1729)までの嵩山村よりの差出、書上及び廻状、触書等の控を収録した庄屋史料である。原本は不明で、享保に近い時代の写本である。朝鮮使節関係記事を摘記すると、宝永3年(1706)戌3月並びに正徳2年(1712)辰11月「三州八名郡嵩山村御指出帳」に「朝鮮人琉球人来朝之節、吉田ヨリ被仰付次第人足出シ来り候」、享保3年(1718)戌10月「覚」に「一、天和弍年中朝鮮人御参向」・「一、正徳元卯之年中朝鮮人御参向」とある。享保4年(1719)亥8月9日付「覚」には朝鮮人来朝の節御立往足軽の書き上げがあり、享保5年(1720)子2月6日付「覚」は正徳度朝鮮使節通行時の役負担内容が記されている。享保6年(1721)4月付「覚」には朝鮮使節来朝における嵩山村高掛金が記されている。

2. 備考

豊橋市役所刊行。1964・1965年。

②は、豊橋市嵩山町の夏目憲二氏所蔵。

『長崎県史』史料編第二

1. 内容

長崎県下の諸藩の近世史料が収録されている。対馬藩関係の史料として「御壁書控」「壁書控上」「壁書控下」「八郷御壁書控」が収録されている。「壁書」というのは藩から通達された法規・法令の総称である。「御壁書控」には寛文11年(1671)から延宝7(1679)まで、「壁書控上」には延宝9年(1681)から元禄4年(1691)年、「壁書控下」には元禄4年から同11年(1698)、「八郷御壁書控」には寛文10年(1670)から正徳4年(1714)までの文書が収録されている。喧嘩口論の停止、キリシタン禁制の覚書、他国商売に関する注意書きなど、その内容は多岐にわたっている。なかには朝鮮渡航に際しての禁制、朝鮮貿易における禁制、倭館火事について、倭館在留の日本人が濫りに釜山浦に出ないようにとの命令などが含まれている。

2. 備考

長崎県史編纂委員会編。長崎県刊行。1964年。

『日光市史』史料編中巻

1. 内容

朝鮮通信使が日光東照宮および大猷院に参詣した時の史料を収める。史料一～史料三十までの合計三十点が掲載されており、通信使による社参行為を考える上で有用である。

史料一「寛永日記」などの幕府側の史料や、史料二「金東溟海槎録聞見雑録」など使行録、史料七「東照社縁起」のような絵巻物、史料十一「朝鮮国より東照宮へ奉納の鐘の銘」といった金石文など様々な性質の史料を翻刻している。本書に掲載された史料には抄出のものが多い。

2. 備考

日光市史編さん委員会編。日光市刊行。1986年。

『日本経済叢書』第十三巻・第十六巻・第二十六巻

1. 内容

〔第十三巻〕

対馬藩士、陶山訥庵(鈍翁とも)の著作集が収められている。

この中で主に朝鮮に関わる史料を挙げておくと、「口上覚書上巻」、「潜商之儀被仰上書」、「潜商議論」、「対韓雑記」、「竹島文談」がある。

「口上覚書上巻」は、正徳2年(1712)に奉行所に差し出された口上書である。領民の耕作、水利、木庭作などその内容は雑多であるが、なかには慶長度の朝鮮通信使に言及した箇所も見られる。

「潜商之儀被仰上書」は、享保6年(1721)成立である。朝鮮から人参を密輸した者への処分に対し、藩から陶山訥庵に問い合わせがあったため、その答申をまとめたのが本書である。享保6年の「潜商議論」は、この朝鮮密輸事件の処分について雨森芳洲、松浦霞沼、陶山訥庵の意見書をまとめたもので

ある。

「対韓雑記」は、朝鮮と対馬の関係の歴史を国内外の多種多様な史料を引用しながら解説したものである。朝鮮との貿易、朝鮮から流入する米に頼らざるを得ない対馬の事情などが赤裸々につづられている。後部に「別録」が付されており、ここには宗家歴代当主の事跡や朝鮮の歴史、地域区分、官位についての記述がある。

「竹島文談」は、陶山訥庵の竹島に対する意見をまとめたもので、賀島に宛てた書状および加島からの返書が付されている。

〔第十六卷〕

「草茅危言」が含まれている。本書は、中井竹山が政治・経済・社会の問題について論じた著である。松平定信の問いに応じて寛政元年(1789)の上呈されたものである。卷之四には「朝鮮ノ事」が収録されており、朝鮮通信使のありかたに関する議論がなされている。具体的には、通信使の応接により日朝ともに財政を圧迫しているため、通信使の簡素化を図るべきであると竹山は述べている。

〔第二十六卷〕

対馬・朝鮮に関わる史料として、「賀島兵介言上書」「桂川答問書」が収録されている。

「賀島兵介言上書」は、対馬藩士の賀島兵介が藩主へ提出した意見書である。当時の藩内における経済上の問題を指摘し、藩主に対して善政を行なうよう求めた言上である。朝鮮と対馬の通交、貿易などの実情がこと細かに記されている。

「桂川答問書」も同じく対馬藩士の松浦桂川が記したもの。対馬藩の政治経済問題を十六カ条にまとめられており、第九条・十四条・十五条には朝鮮交易に関する桂川の意見が率直に述べられている。

2. 備考

滝本誠一編。日本経済叢書刊行会刊。1915年(第二十六巻は1916年)。

なお、『日本経済叢書 第四巻』にも陶山訥庵の著作集が収録されている。

また、『日本経済大典』第23巻や、菅野和太郎編『中井竹山集』(『近世社会経済学説大系』)にも翻刻がある。

『日本庶民生活資料集成』第二十七巻

1. 内容

①老松堂日本行録、②海東諸国紀、③日本往還日記、④看羊録、⑤海游録、⑥朝鮮来聘宝曆物語、⑦使琉球雑録、⑧中山伝信録、⑨使琉球記、⑩中尾次政隆翁日誌、⑪李朝実録抄、⑫喜安日記を収録する。

①から⑥までが日朝関係資料、⑦から⑫までが琉球に関する史料である(なお、⑪は「李朝実録」から琉球関係資料を抜粋したものである)。

⑤は、享保度の通信使来聘の際、製述官として随行した申維翰の記録である(詳しくは別項解説参照)。

⑥は、宝暦度の朝鮮通信使の記録を物語風にまとめたものである。通信使たちの帰路に、鈴木伝蔵による通信使殺害事件が起こっており、この間の事情も本書に詳しく記述されている。宝暦度通信使の記録の他に、「韓人来朝の由来」「朝鮮国方角、言語、衣服、土産の事」「中華十五省の分」「朝鮮国祭の記」も収録されている。

2. 備考

三一書房刊行。1981年。

「朝鮮来聘宝暦物語」は、『増補朝鮮信使来朝帰帆官録』（明石書店、1992年）にも収録されている。

『はままつしし しりょうへんに浜松市史』史料編二

1. 内容

朝鮮使節通行時の浜松・舞坂の状況、使節の動向（崔天宗殺害事件）などに関する史料。

濱松宿古来書留二二、文化8年（1811）朝鮮人来聘之事、都田村年代手鑑など収める。

2. 備考

浜松市役所刊行。1959年。

『ひろしまはん ちょうせんつうしんしらいへいき広島藩・朝鮮通信使来聘記』

1. 内容

①「寛永度朝鮮人来聘記」一冊、②「享保度朝鮮人来聘記」一冊、③「延享度朝鮮人来聘記一～六」六冊、④「延享宝暦度朝鮮人来聘記」一冊、⑤「宝暦度朝鮮人来聘記一～三」三冊、⑥「宝暦度朝鮮人来聘記」三冊、⑦「古今聞書朝鮮人来朝記」一冊の写真版および翻刻に解題を付したのが本書である。年代は、寛永～宝暦年間（1624～1763）にわたる。いずれも呉市入船山記念館所蔵の手島家文書中のものである。

①・②・⑦のうち、①・②は通信使全般、特に幕府による通信使の応接に関わる史料であり、⑦は正徳度の記録である。

残りの③～⑥は、広島藩関係の記録であり、宝暦度のものに関しては家老格として通信使応接に当たった年寄堀勘解由あるいはその家来の覚書風の日記を含んでいる。関連史料については「解題」に詳しい。

2. 備考

呉市入船山記念館編。呉市刊行。1990年。

『福岡県史』近世史料編 福岡藩地方(1)、年代記(1)

1. 内容

①福岡藩浦方(1)「朝鮮人来朝立水夫賃銭為手当軒別老文切銭帳」は、寛政3年(1791)正月に筑前国箱崎浦で作成されたもので、表題の通り朝鮮通信使の通行に備えて水夫賃銭を積み立てた帳簿である。

②年代記(1)「年代記」(桑野岳幸文書)は、桑野権右衛門寛敬(1771～1831)改め孫四郎が本木村庄屋在役中の文政8年(1825)に、同村の元大庄屋中村伝五郎督屋(1736～1801)がその晩年においてものした編書を筆写したものである。同書には、寛延元年(1748)の朝鮮使節来朝、宝暦13年(1763)12月の同使節藍島滞舟が記されている。

2. 備考

西日本文化協会編。福岡県刊行。1998年。

『福岡藩朝鮮通信使記録』

1. 内容

黒田家文書(福岡県立図書館所蔵分)より朝鮮通信使関係記録が翻刻されている。全13巻。朝鮮通信使は対馬・壱岐を経て、福岡藩領内の相島に寄航し、そこから赤間関に向かうこととなっていた。そのため、福岡藩は相島で通信使を饗応する役や、前後における警備役を課されていた。本書には、天和2年(1682)第7回～文化8年(1811)の第10回に至るまでの藩による記録が収められており、福岡藩の通信使への対応に関する記事をかなり詳細に見ることができる。

構成は以下の通りである。

- ①第一巻「天和二年 朝鮮人来朝記録 第四」「正徳元辛卯年 朝鮮人来聘記 卷之二」
- ②第二巻「天和二 朝鮮人来朝記録 第一」「天和二 朝鮮人帰国記録 第四」「天和二 官人来帰御浦方記録」
- ③第三巻「天和二 朝鮮人来朝万調物本帳 上第一」「天和二 朝鮮人来朝万調物諸役人江相渡帳 下第二」「天和二 朝鮮人帰国万調物本帳 上第一」「天和二 朝鮮人帰国万調物諸役人江相渡帳 下第二」
- ④第四巻「天和二 朝鮮人来朝記録第二」「天和二 官人帰国御船手方記録」「朝鮮人帰国記録 第一」「自正徳元年辛卯年至同二年壬辰年 江戸向朝鮮人帰国記 卷三」
- ⑤第五巻「天和二 朝鮮人来帰所々飾方記録 第二」「天和二 官人来帰相嶋定番衆記録」「享保四 朝鮮人来聘記 八 問合之部」「延享五 朝鮮人来聘記 八」
- ⑥第六巻「享保四巳亥年 朝鮮人来聘記 三」「享保巳亥年 朝鮮人来聘記 四」「享保四巳亥年 朝鮮人来聘記 七」「享保四巳亥 朝鮮人帰国記」
- ⑦第七巻「寛延元戊辰年 朝鮮人来聘記 五」「寛延元戊辰年 朝鮮人来聘記 六」「寛延元戊辰年 朝鮮人来聘記 七」「寛延元戊辰年 朝鮮人来聘記 九」「正徳元辛卯年 朝鮮人帰国記 卷四」

- ⑧第八卷「宝暦十三癸未年 朝鮮人来聘記 五」「宝暦十三癸未年 朝鮮人来聘記 六上」「宝暦十三癸未年 朝鮮人来聘記 六下」
- ⑨第九卷「天和二年 朝鮮人帰国記録 第二」「天和二年 朝鮮人帰国記録 第三」「享保四己亥年 朝鮮人来聘記 一」「享保四己亥年 朝鮮人来聘記 五」
- ⑩第十卷「享保四己亥年 朝鮮人来聘記 二」「享保四己亥年 朝鮮人来聘記 六」「寛延元戊辰年 朝鮮人来聘記 一」「寛延元戊辰年 朝鮮人来聘記 二」
- ⑪第十一卷「宝暦十三年 朝鮮人来聘記 一」「宝暦十三年 朝鮮人来聘記 二」「宝暦十三年 朝鮮人来聘記 七」「宝暦十三年 朝鮮人来聘記 八」「宝暦十三年 朝鮮人来聘記 九」「宝暦十三年 朝鮮人来聘記附録」
- ⑫第十二卷「享保四己亥年 朝鮮人帰国記 二」「寛延元年 朝鮮人来聘記 三」「寛延元年 朝鮮人来聘記 四」「官人来朝帰帆之部」
- ⑬第十三卷「宝暦十三年 朝鮮人来聘記 三」「宝暦十三年 朝鮮人来聘記 四」「宝暦十三年 朝鮮人帰国記 一」「宝暦十三年 朝鮮人帰国記 一」「宝暦十三年 朝鮮人帰国記 二上」「宝暦十三年 朝鮮人帰国記 二下」「宝暦十三年 朝鮮人帰国記 於大坂横死人之一件」

2. 備考

福岡地方史研究会古文書を読む会編。福岡地方史研究会刊行。1993～2000年。

『ほうしゅうがいこうかんけいしりょうしよかんしゅう芳洲外交関係資料書翰集』

1. 内容

①「雨森芳洲外交関係資料集」には、外交関係資料を収録している。本書に付された「解説」を参照しながら、以下に資料名及び所蔵先、資料の概要を示す。

「斛一件覚書」(雨森芳洲文庫蔵)

これは、対馬藩が朝鮮から受け取る歳賜米の受領の際に問題となる、升の単位に関する覚書である。本史料では、升の換算率の基準を定めるための交渉過程、そして、その結果を記している。

「韓学生員任用帳」(檜垣元吉蔵)

享保5年(1720)成立の原本と、文化14年(1817)の写本を合冊した資料。編者によると、もともとは宗家文庫所蔵のものであろうという。朝鮮語通詞の養成制度の成立事情、過程、内容、成果および芳洲の外交思想をうかがい知ることのできる資料である。

「朝鮮風俗考」(雨森芳洲文庫蔵)

享保5年成立。李氏朝鮮の成立の歴史と沿革を略記したもの。林大学頭(信篤)の求めに応じて芳洲が記したもの。

「享保辛丑年 雨森東五郎朝鮮佐役被差免候節差出候書付」(雨森芳洲文庫蔵)

芳洲が朝鮮方佐役(朝鮮往来に関する庶務を司る役)の辞任を申し出た際の書付。辞任の背景には、対馬藩の抜荷一件に対する処分への不満にあることが記されている。

「交隣提醒」(雨森芳洲文庫蔵)

芳洲の外交思想および当時の朝鮮通交の実態を知ることのできる資料。本書の中で、芳洲自身が「朝鮮交際の儀は第一人情を知り候事肝要に候」と述べているように、内容は朝鮮の人情や政情などにも及んでいる。

「裁判記録」(お茶の水図書館蔵)

芳洲が裁判(対馬から派遣される外交使節)として釜山に赴き、外交交渉を行なった時の記録。芳洲の主な役割は、東照宮祭祀のための送使要求と、対馬が朝鮮から受け取る歳賜米についての交渉であった。全4冊で、年次は、享保14～15年(1729～1730)に及ぶ。

「隣交始末物語 隣交始末物語句解」(雨森芳洲文庫蔵)

文禄・慶長の役後の日朝国交回復に至るまでの過程をまとめた資料。

「詞稽古之者仕立記録」(大韓民国国史編纂委員会蔵)

朝鮮語通詞の養成に関する資料。末尾に芳洲から稽古通詞たちへの書簡が付されている。

「信使停止之覚書」(雨森芳洲文庫蔵)

宝暦3年(1753)、大順院(第27代藩主宗義蕃)の代に、朝鮮通信使の護衛任務が藩財政を圧迫し、転じては、幕府の浪費となることを主張したもの。

②「雨森芳洲書翰集」には、芳洲発給の書状が編年順に収録されている。末尾に「雨森先生之事」と題された対馬藩医が記した雨森芳洲に関する記録を付している。

2. 備考

関西大学東西学術研究所資料集刊11-3、雨森芳洲全書3。関西大学東西学術研究所「日中文化交流の研究」歴史班編。関西大学刊行。1982年。

「裁判記録」のうち、本巻に収録されなかった史料は、『続芳洲外交関係資料集』(別項参照)に収める。

『^{まいばらちょうし しりょうへん}米原町史』資料編

1. 内容

延享4年(1747)、翌年の朝鮮通信使来聘に伴い、醒井宿における宿駅ならびに助郷の負担数、及び提供方法についての記録。

延享4年7月、朝鮮通信使来聘に伴う宿駅ならびに助郷の負担数、及び提供方法の記録などを収録する。

2. 備考

米原町史編さん委員会編。米原町役場刊行。1999年。

『^{やまぐちけんし しりょうへん きんせい じょう げ}山口県史』史料編 近世1上、下

1. 内容

「毛利家四代実録」は、明応6年(1497)の元就出生より、元就・隆元・輝元・秀就四代の事蹟を編年体で記述し、慶安4年(1651)の秀就逝去までの155年間をまとめたものである。文化6年(1823)から萩藩によって編集が始まり、明治26年(1893)に終了した。「毛利家三代実録考証」とは、「毛利家三代実録」の史料編として編集されたものである。

①の朝鮮通信使関係記事としては、寛永20年(1643)の朝鮮通信使を萩藩がその領国内の馬関・上関で饗応したこと、鞍置馬調達の命をうけたこと、使節の動向についてのものがある。

②に収録されているのは、元和3年(1617)の朝鮮使節来日に際して、使節の接待を命じた8月6日付益玄(益田玄蕃頭元祥)宛の宗瑞(毛利輝元)書状の写である。

①上巻「毛利家三代実録考証 百十二」

②下巻「毛利家四代実録 卷卅二」

2. 備考

山口県刊行。1999年。

『楽郊紀聞』

1. 内容

対馬の人中川延良(号、楽郊)が記した『楽郊紀聞』を翻刻し、注を加えたものである。安政6年(1859)ごろ完成。全13巻で、①には1～7巻が、②には8～12巻および「鶏肋篇」1巻が収められている。歴代対馬藩主の事跡や、対馬の地誌、風聞などが収められている。各巻において朝鮮関係の記事が散見される。中でも②には、朝鮮に加藤清正の古城があるとか、「ヤギ」という言葉が朝鮮語由来のものであるなど、朝鮮に関する風聞がまとめて記されている。

2. 備考

東洋文庫307・308。中川延良著。鈴木棠三校注。平凡社刊行。1977年。

『隣語大方』

1. 内容

江戸期の日本語を草書体によって示し、諺文による解釈を施したもの。18世紀末成立。様々な異本が存在し、本文には、日朝双方の学者により手が加えられた形跡がある。本書は、朝鮮人のための日本語学習帳であり、日本人のための朝鮮語学習帳でもある。本書に影印されたのは、朝鮮司訳院を通じて出版された朝鮮版である。

「交隣須知」(別項参照)が単語を中心とした学習帳であるのに対し、本書は文章や会話文を中心とした、より高度なテキストである。その内容は、「公儀之事」をはじめとした心得書や教訓的なものである。中には、書簡文の手本と思われるような文章も見られることから、実践的な文例集としても機能していたのであろう。

2. 備考

Ⅲ. 近世

京都大学国語学国文学研究室編。京都大学国文学会刊行。1963年。

底本は、ソウル大学校附属図書館所蔵本(旧奎章閣本)で、影印とともに釈文および索引が付されている。

『倭館館守日記・裁判記録 対馬宗家文書第Ⅲ期』

1. 内容

対馬宗家文書シリーズの第Ⅱ期は、国立国会図書館所蔵の対馬宗家文書より、倭館館守日記359冊と、裁判記録272冊をマイクロフィルムに収録し、別冊を付す。朝鮮に置かれた倭館の「館守日記」は、貞享4年(1687)(館主は22代吉田作右衛門)から明治3年(1870)(104代番高麗造)までが含まれている。また、外交交渉にあたる役人が記した「裁判記録」は、宝永2年(1705)から明治3年のものが収録されている。

2. 備考

田代和生監修。ゆまに書房刊行。2004～2006年。